

# 東アジアの視野から見た朱舜水研究

徐 興慶

## 序論

近世初期に日本へ渡航した明末儒者朱舜水（1600-1682）に関する日中文化交流史の研究は、今日に至るまですでに百年余りの歴史を経ており、<sup>(1)</sup> 目下、朱舜水全集の版本は九種類に達する。<sup>(2)</sup> 日中の学界の状況を回顧すると、戦後における朱舜水研究は急速な発展の趨勢が見られる。特に1986年12月から九州歴史資料館の分館柳川古文書館が「安東家史料目録」を学界に公開して後、朱舜水の書簡・筆語などが続々と発掘され、新たな朱舜水研究のブームを引き起こし、その研究の量と質の成果は共に増加している。

一方、過去数十年來、朱舜水研究の参考文献を整理した学者も少なくない。まずは、1961年に石原道博氏が『朱舜水』（東京：吉川弘文館）として学界に公刊した人物叢書がその濫觴であろう。台湾においては、王進祥氏の『朱舜水評伝』（台北：商務印書館、1976）、頼橋本氏の『中国歴代思想家 朱之瑜』（台北：商務印書館、1978）、田原剛氏の『朱舜水研究』（台湾大学修士論文、1978）、朱力行氏の『朱舜水的一生』（台北：世界書局、1982）、王瑞生氏の『朱舜水學記』（台北：漢京文化公司、1987）などにはいずれもその参考文献が整理されている。

しかし、朱舜水研究の関係資料は主に日本側に所蔵されるほかは、一部が中国大陸及びベトナムに散見され、その蒐集作業は、困難な面が多々ある。上述した参考文献の整理は、大抵石原道博氏の版本に基づいたもので、筆者は多数の新しい研究文献が未収録であることを考慮し、1992年に出版した『朱舜水集補遺』に「朱舜水研究参考文献」を補った。<sup>(3)</sup> その内容には、A：伝記資料・全集・詩文、計21項、B：単行本16項、C：論文129項などがある。その後2004年に林俊宏氏が『朱舜水在日本的活動

及其貢献研究』の中で、筆者が補遺した文献を参考に再度整理を行っている。<sup>(4)</sup> 筆者はこれまでの全集に収録されていない朱舜水宛の木下順庵書簡を加え、2004年11月に再度『新訂朱舜水集補遺』を出版した。その付録三には「朱舜水研究参考文献」として、A：伝記資料・全集・詩文計87項、B：専書135項、C：論文284項、D：新聞記事22篇として参考文献を編纂した。<sup>(5)</sup>

同時期に、米国で教鞭を取っている呂玉新氏も「有関朱舜水研究目録」<sup>(6)</sup>を台湾で発表し、その内容は(一)日本語文献：書籍236項、論文66項(二)中国語文献：書籍38項、論文46項(三)英語文献：書籍12項、論文10項となっている。主に早期の水戸藩における朱舜水関係の文献を紹介するほか、彰考館、茨城県立図書館所蔵の徳川光圀の関係資料、さらに米国側の朱舜水研究の情報を提供している。

この数を見ると、最近二十年來、日本、中国大陸及び台湾における朱舜水の伝記資料や全集などの量は約四倍に伸びており、単行本は八倍以上、論文は二倍以上にまで増加している。内外の学者がいかに朱舜水研究を重視しているかが伺われる。しかし、日中の学界においては、朱舜水の研究史に関する回顧やその内容を分析する論説は意外に少ないように思われる。管見では、1982年に朱力行氏が出版した『朱舜水的一生』の第三章にある「考證及相關資料」<sup>(7)</sup>の中に簡単な回顧があるのみであった。また、1993年の筆者による「中日文化交流における朱舜水研究」一文には、日本、中国大陸及び台湾の朱舜水研究の發展状況の分析がある。<sup>(8)</sup> その後十年を隔て、2003年に朱舜水誕生400周年を記念に彼の故郷浙江省餘姚県で九州大学と復旦大学の共催の国際シンポジウムが開かれた。その際、茨城県立歴史館の研究員の久信田喜氏が「水戸における朱舜水研究の現状」を発表し、『水戸市史(中巻一)』(1968)、『水戸光圀』(1972)、『水戸学研究』(1975)、『水戸史学』(1982-95)、『水戸史学先賢伝』(1984)、『文恭先生朱舜水』(1989)、『茨城史学』(1991)、『茨城県立歴史館館報』(1995-96)などの文献を利用し、水戸における朱舜水の研究史を述べている。<sup>(9)</sup> さらに中国の趙建民氏は「繼往開來写華章 朱舜水研究的回顧与前瞻」で、今後の朱舜水研究の新しい課題とその重要性を語っている。<sup>(10)</sup>

日本、中国大陸、台湾において朱舜水研究の量は急成長しているように見えるとはいうものの、その研究史の成果の情報交換は容易ではない。国際学术交流が日増しに

重要視されつつある今日では、ここ数十年の朱舜水研究の内容とその趨勢を検討する必要があるように思われる。本稿では、朱舜水の研究を検討しながら、下記の四点を論じたい。

- (1) 朱舜水研究の刊行文献とその内容の分析
- (2) 朱舜水研究の特徴と人物交流による思想主張の異同の検討
- (3) 問題意識 学術研究と政治的訴求の狭間で
- (4) 朱舜水研究の展望

本稿は上記の諸問題を検討することによって、研究史の問題点とこれからの朱舜水研究の方向とその発展性を見出し、同分野の研究者に寄与することを目的とする。

## 一、朱舜水全集の刊行とその内容

言うまでもなく、朱舜水研究の大半はその全集に載った資料に依拠しており、つまり、全集に収録された内容は朱舜水研究の基礎文献と言える。

朱舜水は計22年間日本に滞在した。そのうち、17年間は江戸と水戸で過ごした。その間、徳川幕府（主に水戸藩）の儒臣らは彼の講学を通じて積極的に中国古来の伝統のある礼儀制度を学ぼうとしていた。例えば1670年に徳川光圀は朱舜水の『学宮図説』を三十分の一の比例で縮小した模型に拠って、文廟・啓聖宮・明倫堂・尊経閣・学舎・進賢楼・廊廡・射圃・門楼・牆垣などを完成させた。その建設のプロセスについて、門人の今井弘濟（1651-1689）・安積覚（澹泊、1656-1737）は、次のように述べている。

梓人所未能通曉者、先生親自授之、及度量分寸、湊離機巧、教諭縝密、經歲而畢。<sup>(11)</sup>

1672年の冬、水戸の彰考館が開館した際、徳川光圀は朱舜水を賓師として藩儒らに積奠、改定儀注など儀式を習わせ、中国の礼節の梗概を詳しく学んだ。また1673年に朱舜水は、徳川光圀の別荘にて学官を装い、学習者に礼学の制度の学習を究めさせた。さらに1674年に徳川光圀は朱舜水に朝服・角帯・野服・道服・明道巾・紗帽・幘頭などを作らせ、すべての明朝の衣冠を完成させた。水戸藩で礼教文物がこのように盛ん

に制作されたことから、如何に朱舜水の教えに深い影響を受けたかが伺われる。

日本で最初に朱舜水の関係資料を整理したものは、朱舜水が逝去後の貞享元年（1684）に加賀藩主の前田綱紀（1643-1724）がその藩儒の源（五十川）剛伯に編輯させた『明朱徵君集』（10巻）である。しかし、この全集は、慌しく整理され、漏れが多数あったため、日本における朱舜水の文化活動の全貌を知ることは困難である。その後前田綱紀は、この全集に若干の修正、補遺を施したが、刊行するまでに至らなかった。日本では、この版本は「加賀本」と呼ばれ、朱舜水研究で重要視された貴重な資料の一つである。「加賀本」を手懸りに、朱舜水の門人らは中国の書簡・尺牘の様式、深衣・幅巾及び喪祭の制度に興味をもち、その全集を編集し始めた。まず、寶永五年（1708）に門人の今井弘済は朱舜水に教わった各種の中国文物に名前を付け、安積覚は文物の規則や尺度を図説した上、『朱氏舜水談綺』を刊行した。さらに正徳五年（1715）に水戸藩主徳川（源）綱條は父光圀が編輯した朱舜水の書簡を『朱舜水先生文集』として刊行したが、これは通称「水戸本」と言われる。<sup>(12)</sup>また享保五年（1720）に茨城多左衛門氏が刊行した『朱舜水先生全集』（28巻）は、この「水戸本」に基づいて復刻したものである。中には徳川綱條・安東省菴（守約、1622-1701）の序文や安積覚の略譜が加えられている。さらに明治四十五年（1912）に稲葉君山氏が『明朱徵君集』と『朱舜水先生全集』とを合刊し、これには元駐南京の日本領事館員が写した朱舜水の詩文集「泊舟稿」15首（江南図書館所蔵、張廷枚の『姚江詩存』も収録された）が加えられている。この版本は『朱舜水全集』と称し、東京の文会堂から鉛印本として出版された。その巻首に元台湾総督府民政局長の後藤新平（1875-1929）の序文があり、「稲葉本」と呼ばれる。

その後、馬浮氏の『舜水遺書』（25巻、1913）、『朱舜水全集』（台北：世界書局、1962）、『舜水遺書』（台北：古亭書屋、1969）、朱謙之氏の『朱舜水集』（北京：中華書局、1981）などが続々と翻刻、整理されつつある。

上記、九種の全集の版本以外に、寶永五年京都の書肆柳枝軒の茨城多左衛門が翻刻した『舜水朱氏談綺』がある。この本の原資料は水戸の彰考館に所蔵され、朱舜水の門生人懋齋（野伝、?-1696）が日常に詢問した簡牘素牋の式、深衣幅巾及び喪祭の制度を、今井弘済が「所聞事物名称」として記録し、安積覚がその編集を完成させた

ものである。全書は計上・中・下三巻あり、元・亨・利・貞の四冊に分かれている。この本の巻首には「寶永四年丁亥（1707）仲冬水戸府下澹泊齋安積覺敘」と記され、正徳三年（1713）一月に再版された。

なお、1988年に中国の華東師範大学にある上海文献叢書編輯委員会は『舜水朱氏談綺』を映写出版し、李大釗氏の「朱舜水之海天鴻爪」、「東瀛人士關於舜水事蹟之爭訟」などを付録とした。最近、日本では倉員正江氏の「『舜水朱氏談綺』編纂をめぐって」の中に彰考館の出版文化の角度から安積覺らがいかに苦勞をして『舜水朱氏談綺』を編集したか、その経緯が述べられている。<sup>(13)</sup>

## 二、朱舜水の研究史

朱舜水の研究史を回顧するに当たり、上述の朱舜水の伝記資料・全集・詩文などの刊行状況を分析するほか、日本、中国大陸、台湾から発行された日本語と中国語の単行本・学位論文・雑誌論文の内容、さらにその他の新聞関係記事からもその研究史の発展経緯を探らなければならない。そもそも日中の学界においては朱舜水研究の問題意識は幅広く設定されている。以下は日本、中国大陸、台湾、アメリカの順に、それぞれの研究史を述べていきたい。

### （一）日本における朱舜水研究

ここ百年来、日本の学界が開拓してきた朱舜水研究は、凡そ下記の六つの領域に分けられる。

#### （1）徳川光圀と水戸学の発展

朱舜水の学問的主張は、前期水戸学の形成や徳川光圀の『大日本史』の編纂事業に相当な影響をもたらしている。従って朱舜水と徳川光圀の交流関係や朱舜水と前期水戸学の発展などの問題は、日本の学界に注目される焦点の一つである。九十年代に至るまでのこの分野の研究は創始期ともいうべきであろう。水戸藩において朱舜水が如何に忠臣義士の身を以て、その学問を伝えたか、徳川光圀の文治主義政治の推進にどのような影響をもたらしたのか。さらに二人は思想面において、どのように激励し合

い、受容の道を開き、水戸学の形成に繋いでいったのが研究の重点となっている。例えば、黒板勝美氏は「水戸学派の学問の根本は、朱舜水の力を借りるところが頗る多い、その功績が顕著である」と述べるほか、高須芳次郎氏は、義公の徳川光圀の思想と学芸は、朱舜水の影響を深く受けたことに疑いがないと水戸学の源流を考察している。この点について、朱舜水は「與安東守約（省菴）書」には、次のように述べている。

水戸學者大興、雖老者白鬚白髮亦扶杖聽講、且贊儒道大美、頗有朝聞道夕死而可之意。<sup>(14)</sup>

水戸藩の学者は、儒学の教養に如何に共鳴に及んでいたかを述べている。また、松本純郎氏は、徳川光圀の『常山文集』に収録された「祭明故徵君文恭先生文（貞享元年、1684）」を引用し、次のように述べている。

至誠を傾けて之を仰いだ光圀が、正にその頃、国史の紀伝を一応完成し、国体の根本について徹底せる眼識を把持していたことを我々は思うべきである。即ち我が国体を根本と仰ぎつつ、然もその根本に立って舜水を師とし、謙虚に教えを受けようとした光圀の態度にこそ、水戸学の真の姿を見ることができよう。<sup>(15)</sup>

また、水戸学派の学者・彰考館総裁の青山延于（雲龍、1775-1843）は、朱舜水の忠義大節を偲ぶため、朱舜水逝去の百年余り後の寛政十年（1798）に『大日本史』を編纂した多くの藩儒らと「舜水祠堂」の傍に桜の木を植え、その「舜水先生祠堂植桜樹記」に、

唯先生は則ち然らず、感慨奮激、以て興復を図る、其の安南に在るや、白刃身に交て屈せず、其の大節凜々として巖霜烈日の若きものあり。事成らずと雖も先生の忠義大節、必ず將に世に被はんとす、則ち天下の士、其れ亦励むこと有らんか。且吾党の士賦して之を伝え、頌して之を宣ぶれば則ち先生の遺風余烈、其れ果して世に被ること有るなり。<sup>(16)</sup>

と記している。

名越時正氏によれば、青山延于らが朱舜水を記念する目的は、単に彼が明清の戦乱を避け日本へ亡命した行為に同情するだけではなく、その時北方からロシアの勢力が

日本へ侵入しようとし、南からはイギリスの船がしばしば日本の近海に現れ始め、即ち、徳川幕府は外国勢力の侵入に脅かされようとする際、亡国遺民朱舜水の忠義正気  
の精神を偲び、水戸学者の危機意識を喚起させることによって、もう一人の彰考館総  
裁の藤田幽谷（1774-1826）が唱える「尊王攘夷」の大義警世説に焦点を当てるのが  
本目的であるという。ここからも朱舜水の忠義思想は水戸学の精神文明に影響を及  
ぼしたことが伺える。

また、高須芳次郎氏は朱舜水の学風について、次のように言及している。

朱舜水は朱子学・陽明学・古学などについて、該博な知識を持ったが、彼の中心  
思想を為すものは、経世実用の学でもあり、それを裏付けてゆくものは史学だっ  
た。例えば、『資治通鑑』を非常に愛読した如きは、彼が抽象理論を排して具体  
的理論を重んじた傾向を明白に示すものである。<sup>(18)</sup>

朱舜水の思想主張については、

ある時代には陽明学に、またある一時期は朱子学に、それから古学にというふう  
に推移し、それらの長所を摂取して、彼の独自の見解に起つに至ったのであろう。  
朱舜水が大義名分を尊重したのも主として、朱子学から来た影響だとして片付け  
るのはどうか。<sup>(19)</sup>

朱舜水の思想主張が水戸学に与えた影響については、

その学風が水戸学構成の上に相当な交渉を有した事は想察するに難しくない。水  
戸学では大義名分を重んじ、経世実用の学を尊み史学上に特殊の興味を感じるな  
ど、何れも朱舜水の学的傾向に似通った一面がある。<sup>(20)</sup>

と指摘している。

なお、徳川光圀も実用、実功を主眼とする朱舜水の学問の優れた点について下記の  
ように感心して述べている。

先生は真の経済の学問なり、假令曠莫無人の野にて都邑を一つ興起せんに、士農  
工商それぞれの者を集めざらんには事成就せまじ。然るに先生一人おはせば、恐  
くは不足なくして都邑成就すべし。先生は詩書禮樂より田畑の耕作、家屋の造様、  
酒食鹽のことまで、細密に究得せるなり。<sup>(21)</sup>

前期水戸学の発展は、すべて朱舜水の影響を受けたものではないが、水戸学の儒学

の普及について、高須芳次郎氏は「水戸学における主要点 「敬神崇儒」の中で、「崇儒」の考は、確かに朱舜水によって鼓吹せられ、それが義公その他の学者をも動かしたであろうことは、想察するに難しくない。また経世実用の学において、支那における有力な学者の意見を採取するについても、舜水が相当に貢献したであろうことも、推想される」と述べている。<sup>(22)</sup>

これらの論述は、その後の日本における朱舜水研究の基礎を導くものといえよう。

## (2) 朱舜水の学芸

朱舜水の学芸について、今井弘済と安積覚は「舜水先生行実」に、下記のように述べている。

雖農圃梓匠之事、衣冠器用之制、皆審其法度、窮其工巧。識者服其多能而不伐、該博而精密也。<sup>(23)</sup>

朱舜水が日本社会に伝えた学芸は、聖廟の建築技術や農業や地理に関する知識及び衣冠裁製等の諸領域に及んでいる。例えば、徳川幕府が朱舜水逝去百年後寛政八年(1796)に再建した聖廟は、朱舜水が水戸藩に遺留した孔子廟の模型によって建て直したものである。その際、聖廟再建をめぐる、次のように検討された。

八年丙辰十二月二十二日、參政攝津守堀田正敦、坐於朝堂、傳命大學頭林衡曰：「曩者廟殿罹災、因循歷年未復故貌、將以近歲大加鼎建、舊制或不愜禮意、宜加審議以備規制、林衡退與諸儒議、乃據投化明人朱之瑜(字魯與、號舜水)製明制孔廟衣樣、(之瑜嘗為水戸源義公製大成殿及門兩廡木樣、藏在其府、詳於廟圖誌)諸加鼎新。」<sup>(24)</sup>

当時幕府老中の「聖堂再建總奉行」松平信明は聖堂を管理する儒官林衡(述齋、1768-1841)に儒臣らと審議を命じ、次の決議案が下った。

其規劃一倣明制、雜以時宜、凡自殿室廊廡門階、以至基礎、砌磚、罍罌之屬、皆鼎新規、以革舊制。<sup>(25)</sup>

新聖廟の大成殿・廊廡・諸門の再建は一年を費やし、その建造は前代未聞の盛況となっていた。また、『日本精神文化大系』に収録された「水戸義公 徳川光圀」では、徳川光圀が門人として『朱舜水文集』を編輯したことや、「彰考館」の設置、五百卷



以上ものの和漢礼典類聚群書を蒐集した学芸事業などについて記述している。<sup>(26)</sup>

このように日本の学界では、朱舜水の学芸の日本社会に対する貢献をめぐる分野も朱舜水研究の重点の一つとなっている。

### (3) 朱舜水の乞師活動

1908年より稲葉君山氏は『日本と日本人』で「朱舜水考」を十一回に及んで連載し、主に近世初期に日本に渡航した明朝知識人の背景を紹介すると同時に、朱舜水を明朝の一流の遺臣とみなしている。稲葉君山氏の「朱舜水考」は日本の学界で最も早く朱舜水を紹介した研究論文であろう。しかし、稲葉氏は長崎で朱舜水と交遊した医者 of 頼川入徳のことを、別の人物「頼川畏三」と見なしているが、筆者の考察では頼川畏三は頼川入徳の令息だと思われる。<sup>(27)</sup>

また、1912年に稲葉氏が『日本と日本人』で発表した「長崎における朱舜水」の一文は、長崎における朱舜水の居留、生活状況及び交遊関係などの問題は具体的に分析せず、限られた資料によって明末清初の戦乱期（正保・慶安・萬治に当たる）の日中政治情勢を概論したのみである。

1912年に満清が滅ぼされ、中華民国が誕生した際、東京の「朱舜水記念会」は朱舜水の渡日250周年を記念するため、『朱舜水』の論文集を刊行した。中では、国府犀東の「朱舜水と安東省菴」が二人の交遊関係に触れたほか、朱舜水の出自・忠義思想、徳川光圀の招聘に伴う事跡及びその学風と精神などが論じられている。<sup>(28)</sup>

徳川綱條刊行の『朱舜水先生全集』（28巻）付録の「中原陽九述略」、「安南供役紀事」の資料では、朱舜水の「日本乞師」活動の始末について記載していないことに鑑み、稲葉君山氏は『華夷変態』、「朱舜水先生行実」<sup>(29)</sup>さらに中国側の『日本乞師記』、『海外慟哭記』などの史料を駆使し、それぞれの資料の信憑性を分析しながら、正保期（1644-1647）における南明政権の「乞師」活動の問題を検討し、萬治・寛文年間（1658-1666）に朱舜水の長崎渡航の動機と南明政権の救援活動とを結び付けようとしていた。また朱舜水の中国の友人張名振、師匠の呉鍾巒、王翊、張肯堂、朱永佑及び長崎で交遊した医者 of 頼川（陳）入徳、禅師の獨立（戴曼公）などの人物像をも分析している。

『先哲叢談』によれば、朱舜水が1683年に逝去の前までに貯めた黄金は三千両あったが、すべて水戸藩に納入されたという。嘗て朱舜水が述べた「中國乏黄金、若用此於彼、一以當百矣」<sup>(30)</sup> に対し、新井白石(1657-1725)は推測して「朱舜水縮節積餘財、非苟而然矣、其意蓋在充舉義兵以圖恢復之用也、然時不至而終可憫哉」<sup>(31)</sup> と言った。新井白石は朱舜水の門生ではないが、朱舜水と深く交遊した京都の朱子学の儒者木下順庵(貞幹、1621-1698)に学んだことがある。このため、新井白石も朱舜水の反清復明に尽くした忠誠の精神に敬意を払い、その「乞師」意識に早く注目し、日本の学界の関心を集めたのである。例えば1945年に石原道博氏が刊行した『明末清初日本乞師の研究』は、朱舜水と乞師活動と関連させた研究の序幕といえよう。石原道博氏の研究については、のちに述べる。

#### (4) 朱舜水の思想と日本儒学史の発展

朱舜水の思想については、高瀬武次郎氏が『史学界』で発表した「朱舜水」(1901)と栗田勤氏が『古蹟』で発表した「朱舜水祠堂考」(1902)が最も早く出た論考であろう。いずれも今井弘済と安積覚が編纂した「朱舜水先生行実」の内容によって考察したものである。

朱舜水は日本流寓の期間中、江戸前期の朱子学派・闇齋学派・古学派の三大主流の儒者らと、直接的、間接的に交遊していた。このため、日本の学界においては、朱舜水とこの三派の代表人物との思想主張の異同について比較研究が行われている。例えば、古学派の伊藤仁齋(1627-1705)は、十九歳から朱子の『延平問答』を暗記し始め、のちに朱子の『性理大全』、『朱子語類』などを深く研究した。伊藤仁齋は三十六歳の時、京都の松下町に隠棲した際、福岡藩儒の安東省菴を通じて、長崎に居留した朱舜水に師事したいと表明したが、朱舜水は、下記のように安東省菴に返信した。

伊藤誠修、學識文品為貴國之白眉、然所學與不佞有異。不佞之學木豆、瓦登、布、帛、菽、粟而已；仁齋之學則雕文、刻鏤、錦繡、纂組也。未必相合...<sup>(32)</sup>

朱舜水自身が世に有益という「経世致用」の学問を主張するのに対し、伊藤仁齋は工巧の学問を求めようとするので、伊藤仁齋の学問は自分と違う方向へ進んでいくと判断したため、安東省菴を通じて伊藤仁齋の長崎来見を遠慮してもらったのである。

『先哲叢談』の記載によると、三十七歳以後の伊藤仁齋は、朱子学の学問主張が孔子・孟子の学問とは、明らかにその差異があると察知したという。そのため、彼は中国の古典原書を探求する方向に換え、『論語古義』、『孟子古義』、『語孟字義』、『童子問』などシリーズ的な学術書を続々と著した。以降、伊藤仁齋の学問や思想主張は、徐々に宋朝の理学そのものを離れ、さらに理学の虚説を批判し始めた。伊藤仁齋は学問主張を変えた後、再び安東省菴を通じて自著の批正を朱舜水に仰いだ。これに対し、朱舜水は次のように述べている。

伊藤誠修兄策問甚佳、較之舊年諸作、遂若天淵。儻由此而進、竟成名筆、豈遜中國人才也。敬服敬服！（<sup>33</sup>）

上記のように伊藤仁齋と朱舜水との接点があったからこそ、日中の学界においては二人の儒学に対する思想主張についての研究が展開されたと思われる。<sup>(34)</sup> 晩年の伊藤仁齋は京都の堀川で「古義堂」を開設し、三千の生徒に「古義学」を唱え、「堀川学派」と呼ばれるようになった。伊藤仁齋は山崎闇齋（1618-1682）が開いた私塾の学問教育と分庭抗礼を意識していた。

また、朱舜水の実学思想も重要な学術研究の一つの課題となっている。特に儒学が日本社会への実用面の角度から、「経世済民、経世致用」という学問を検討しつつ、その東アジア文明の発展にどう影響を与えたかという課題が注目される。<sup>(35)</sup>

嘗て朱舜水は門人に「学を為す道は、外観にその名を脩む者は、益なし。必ず身を以て力行すれば得なり、故に子貢は天資穎悟と言えとも、聖道の伝が得られず、華やかと不実によるほかならない」と語った。<sup>(36)</sup> その全集の中に、至るところにその実学思想の主張が見出せる。

また、1990年代前後から次第に重視されるようになったのは、江戸中期から儒学の「実践」、「実用」、「実証」のような思想面が日本、朝鮮の社会へ与えた影響などの問題である。1989年11月に東京で開かれた「三浦梅園と東アジアの実学」国際シンポジウムでは、江戸中期の儒医三浦梅園（1723-1789）の実学と東アジア実学の発展の関係が考察された。また、1990年5月に韓国の成均館大学で「東アジア三国における実学思想の展開」と題した国際シンポジウムでは、近世の実学思想の系譜が検討されたほか、「実学」が社会の改革において、どのような役割を果たしたか、「実学」が教育

の発展にどんな影響がもたらされたかが関心を呼び、江戸・京都・大阪などの「実学」の形成と地域の特性そのものが検討された。<sup>(37)</sup>

この会議では、六名の中国の学者が参加し、彼らは「明清の実学思潮」を主題に論文を発表し、朱舜水の実学思想も実学思潮の範疇とされた。辛冠潔氏の「清実学散論」では、朱舜水の「学問は有用に貴ある」の主張や、「宋儒辨析毫釐、終不曾做得一事」、「以時文取士、此物既成塵羹土飯、而講道學者又迂腐不近人情」などの批判は「重事功」の実学であると指摘している。<sup>(38)</sup> 歩近智氏の「東林学派と明末清初の実学思潮」、馮天瑜氏の「咸・道年間の経世実学 中国文化史における方位について」は、朱舜水の実学思想を湖南の王夫之、山西の傅山、河北の孫奇逢などの実学者と並んで「経世致用」とみなし、彼らは明清実学思潮の促進者であると論ずるほか、<sup>(39)</sup> 葛栄晋氏の「清代実学思潮の歴史の変遷」では、朱舜水が門生小宅生順に答えた「学問を為すには、実功、実用をしかるべき」のような思想主張を取り上げ、朱舜水は実学思想の実践者であることを裏付けている。<sup>(40)</sup>

#### (5) 明末遺臣と人物交流

朱舜水は徳川光圀に招聘され江戸へ講学に赴くに至る以前、萬治二年(1659)から寛文五年(1665)までに六年近く長崎に居留していた。安東省菴はこの間、地利の便で常に長崎へ赴き、朱舜水に学問を学んだ。二人は筆談で学問や思想主張を交わすうちに師徒の関係が成り立ち、学問上、安東省菴の思想形成は朱舜水に深く影響された。このように朱舜水と交遊した人物の研究は、少なくない。例えば、近年刊行した徳田武氏の論著には、朱舜水の「勉亭林春信碑銘」及び朱舜水と幕府の儒官人見竹洞(1696-1765)と往来した書簡について、その年代の対比と考察を行い、朱舜水と日本の人物交流の研究を一步前進させた。<sup>(41)</sup>

1981年に朱謙之氏が編集した『朱舜水集』には、朱舜水の「答安東守約問」の筆談8通、筆語34通、及び安東省菴宛での朱舜水書簡55通が収録されている。1986年に筆者は九州歴史資料館の分館柳川古文書館で大量の朱舜水の自筆資料を発掘した。これらの貴重資料を解読し、朱氏の『朱舜水集』と対比した上、新たに安東省菴宛での朱舜水書簡33通、筆語46通を付け加え、『朱舜水集補遺』として出版した。これらの資

料と現存の『省菴先生文集』の書簡とが、二人の交遊関係を研究する基礎文献となっている。補遺の内容は次の四つの分野に分かれている。

- 1、学术交流：师徒関係の礼儀の凡て、正式な書簡の書き方、読書と作文の方法、朱子と陸象山の思想の異同、王陽明の学問、方孝儒と韓愈の文章の比較、六朝と唐・宋文章の区別、李白と杜甫の詩文の優劣など、二人の筆談と問答の範疇は、広範囲に渡る。
- 2、政治と文化制度の探索：例えば、大明科挙、取士の方法、皇族の称号、南明政権の実情、朱舜水の反清復明・「乞師」の意識の告白などの問題。
- 3、朱舜水の思想観に関する問題。
- 4、朱舜水自身の日本での生活に関する問題。

#### (6) 中日文化交流における朱舜水の貢献

朱舜水の学問を求める精神、思想主張及びその日本文化への影響などが最も学界に注目される分野であろう。そんな中で、朱舜水研究に最も実績があったのは、何といっても石原道博氏であるといつてよい。石原氏は日中双方の関係文献を駆使して、まず、朱舜水と「日本乞師」の問題を取り上げ、啓発性のある見解が出されている。

石原氏の朱舜水研究を振り返ってみると、1937年の『東洋歴史大辞典』における朱舜水の人物紹介がその皮切りで、まず「朱舜水と向陵」の一文で、東京にある朱舜水の碑文「向陵」<sup>(42)</sup>の作者が塩谷青山であると分析したが、のち「向陵朱舜水碑の筆者について」で、「向陵」碑文の作者が加賀藩の第五代藩主前田綱紀の事務官石川龍三であるとその分析を改めた。以降、「国姓爺の南京攻略」(1938)、「明末清初請援南海始末」(1939)、「明末清初の南方経営」(1942)、『明末清初日本乞師の研究』(1945)、「鄭成功と朱舜水」(1954)、「板倉氏蔵版「鄭成功贈歸化朱舜水書」について」(1955)などの論考を発表し、朱舜水と日本乞師に関する研究を大いに前進させた。

これらの論著の主な研究内容は、「舜水先生行実」、「安南供役紀事」を解読した上で、中国側の『海東逸史』、『南疆逸史』、『明遺民所知傳』などの史料と対照しながら、南明政権の政治情勢や貿易通商が鄭氏一族の日本乞師と絡み合う複雑な問題を考察し、正保二年(1645)から萬治二年(1659)に至るまでの朱舜水の「海外経営」の行

動を明らかにしたものである。<sup>(43)</sup>

戦後から1980年代中期まで約四十年の間に、石原氏は関係資料の発掘に伴って、朱舜水の研究を精力的に行い、朱舜水の出自・遺墨・思想ないし彼と鄭成功の関係まで幅広く論じ、三十五本に及ぶ論文を発表した。<sup>(44)</sup>例えば、朱舜水の学風は「経世済民」にあり、礼学刑政を以て文物制度伝播研究の主眼とし、宋学の「性」、「命」など空泛の理論に賛同せず、「孝悌忠信」のような日常生活の精神と完璧な人格を育て、国家の人材を養成する実学であることに重点を置いて分析している。<sup>(45)</sup>

また、朱舜水の学風は陽明学派ではなく、朱子学派に属し、古学派に類ずるところがあり、特に古学派の祖の山鹿素行(1622-1685)と古文辞学派の荻生徂徠(1666-1728)の学風に近いと石原氏は指摘している。<sup>(46)</sup>この朱舜水と山鹿素行、荻生徂徠との思想比較は、極めて複雑なので、石原氏は詳しく分析してはいないものの、この分野の研究の必要性を見出している。さらに石原氏は朱舜水の学風を述べるに当たり、その「実理」、「実学」の思想主張にも触れ、思想比較の角度から研究するよう学界に呼び掛けている。<sup>(47)</sup>

上述のように日中の学界において、石原氏の朱舜水研究は高く評価されている。以下ではその研究の重点を概観する。

- (1) 従来日中の学界において、1658年に長崎居留を決心する前に果たして朱舜水は南明政権鄭成功の軍隊と「南京攻略」に参加したかという論争について定論はないが、石原氏は『朱舜水全集』に収録している「與安東守約書」、「中原陽九述略」の「滅虜之策」、及び中国側の資料『海東逸史・朱之瑜傳』などの史料に拠って、当時彼は確かに長江へ赴き、鄭成功の「南京攻略」に参加したと裏づけている。
- (2) 1645年から1659年に至るまで朱舜水が長崎居留を決めるまで、舟山、安南、長崎の間を奔走した貿易活動のルート进行分析し、その長崎居留の年代を明らかにし、日本の学界に朱舜水の長崎における文化交流の研究に関心を喚起した。
- (3) かつて朱舜水が安南で貿易活動をした関係資料が入手できないため、その真相は解明できず、謎のままとされてはいるものの、石原氏は『朱氏舜水談綺』

卷下の「外國傳附」の中から、朱舜水が詳しく記載した安南、暹羅など海南諸国の名称18箇所を列挙することによって、彼は当地の地理知識に深い認識があると論じている。また「草木」の項目から朱舜水は海南諸国の香料を特別に扱うことで、彼の安南での「海外経営」は、南海の特産品香料の取引と関わっていると分析した。

- (4) 石原氏が「鄭成功と朱舜水」で論じた『通航一覽』に収録された「鄭成功贈歸化朱舜水書」<sup>(48)</sup>は偽書かどうかについて、日本の学界では従来争議がある。これについて、朱舜水宛での鄭成功書簡は、ちょうど明朝の永暦十三年(清朝順治十六年、萬治二年、1659)八月の「南京攻略」敗戦後に当たる。この時点は、南明政権が「日本乞師」を急務として進む最中なので、書簡の真実性が高く、偽書ではないと石原氏は指摘している。石原氏は、朱舜水の政治主張は鄭成功との関わりがあるとして、日本の学界で注目を浴びた。

なお、石原氏は「朱舜水先生行実」を取り上げ、朱舜水は「剛毅方直、操履中規、擇交而慎言、晦迹以遠疑……於是人皆服其深密謹厚、而知本末事實」<sup>(49)</sup>と、その人格を分析するほか、朱舜水の学問を為す態度は、「性質謹慎、強記神敏、雖老而疾、手不釋卷。凡所經覽、鉤深體實、博而約、達而醇」<sup>(50)</sup>とされ、朱舜水の文章を、「雄壯古雅、持論逸宕、筆翰如流、隨手成章」<sup>(51)</sup>と評価している。

また、朱舜水の詩作について、石原氏は「與奥村庸禮書」で言及した「吟詩作賦、非學也、而棄日廢時、必不可者也」<sup>(52)</sup>を引用して、朱舜水は現実の社会に無益の詩作に反対すると説明したり、日常生活の方面においては、「平居見客、雖親蜜嘸必具衣冠。謙而接物、不盡人歡；嚴而自持、苟無虚飾、治家以儉、量入為出」<sup>(53)</sup>と朱舜水の儉約家の性格を見出したりしている。さらに、朱舜水は中国の権力闘争に巻き込まれ、やむを得ず、十七年に亘る「海外経営」の一路を辿ったこと、江戸と水戸にて二十二年間滞在しても再婚しないこと、老年に病と闘ったことなど彼の人格像を描いている。

1682年朱舜水の逝去後、同郷の張斐なる人物が長崎に渡航したことで、徳川光圀が一度は張斐を朱舜水の後任者として招聘しようとした問題が、日本の学界に注目されている。張斐について、後藤肅堂氏は『史学雑誌』で「明末乞師孤忠張非文」(1915)

を発表したのがその最初であろう。後藤氏は、のちに『東洋文化』で「明末乞師の張非文」(1925)をも発表した。また、今関天彭氏の「流寓日本の明末諸士」(1928)、名越時正氏の「水戸学派と明末志士」(1957)、吉田一徳氏の「水戸義公光圀、今井弘済と明末志士」(1959)など、張斐と関連のある論文が続々と発表された。これらの論文は主に張斐の出自、安東省菴との往来書簡を紹介し、徳川光圀の招聘の対象となった原因などを取り上げたが、当時、張斐の書簡は全部公開されていないため、その長崎渡航の動機を明らかにできず、後藤氏が論述したままにとどまった。しかし、日本の学界は、続けて張斐の人物研究に関心を寄せている。約四十年を隔て、後藤氏は1963年に中国側の史料を駆使して「朱舜水人物附張非文」を発表したが、張斐の長崎渡航の動機や彼と水戸藩の儒者大串元善(子平、1657-1696)との交流の真相に依然として新しい論点が出せなかった。1980年代後期に至るまで朱舜水の新文献の発掘は限界もあり、その研究は一時的に停滞状態になっていた。

幸い、1986年に九州歴史資料館の分館柳川古文書館所蔵の「安東家史料」が公開された。その際、筆者は九州大学に留学中であつたので、地利の便により、大量の未公開の朱舜水のオリジナル書簡の閲覧と収集ができた。二年間に亘ってこれらの書簡を解読した上、1989年に「鎖国後長崎來航の明人について 張斐を中心に」を発表し、張斐が長崎渡航した動機や目的、さらに徳川光圀が朱舜水の後任者として張斐を水戸まで招聘しようとした経緯を明らかにした。<sup>(54)</sup>

また、これらの朱舜水書簡を日中の学界の参考に供与すべく、筆者は1991年に再度「朱舜水の学説について 柳川古文書館所蔵の書翰を中心に」を発表した。それと先に述べた筆者の『朱舜水集補遺』は、朱謙之氏が整理した『朱舜水集』と朱舜水書簡、筆語とを詳しく対比し、年代を確認した上、新発掘の書簡を改めて増補し、朱舜水研究のさらなる前進に寄与しようとしたのである。

## (二) 中国大陸における朱舜水研究

中国で最初の『朱舜水全集』は、馬浮氏が上述の「稻葉本」を手本に「文集」(25巻)、「釈奠儀注」(1巻)、「陽九述略」(1巻)、「安南供役紀事」(1巻)を集め、さらに「舜水先生行實」を加え、『舜水遺書』(1913)として刊行した。

中国のインテリで朱舜水の日本における事跡に関心を持ったのは清朝の駐日公使館



初任の文化参贊黄遵憲（1848-1905）であった。黄氏が著した『日本国志』では次のように、

華夏中有己丑馮京第、黄宗羲以明魯王以海命、來長崎乞師、不達。朱之瑜亦來乞師、不達。<sup>(56)</sup>

と朱舜水の「日本乞師」とその略伝を記すほか、黄氏の『日本雜事詩』の中に下記の詩を詠んでいる。

海外遺民竟不歸、老來東望淚頻揮。終身恥食興朝粟、更勝西山賦采薇。<sup>(57)</sup>

黄遵憲は朱舜水を海外の忠臣と見做し、その芳名が日本に残された義行を追悼している。黄氏は清末の優秀な外交官であり、著名な詩人でもあった。駐日五年の間（1877-1882）に自ら日本の津々浦々を訪れ、当時日本の産・官・学界数多くの名人と交流し、日中文化交流に力を入れた。また明治維新以降の日本が全力に西洋文明を吸収することによって、日本の近代化を成し遂げた現状を体験した黄遵憲は、中国人として初めて完備した日本研究の『日本国志』を著した。

また、黄氏は水戸学の発展と朱舜水との関係について、相当な認識をも得ている。その『日本雜事詩』の中に、清朝官僚のタブーを避けるため、朱舜水を詠む際、その地名や人名をわざと変えたが、自分は清朝の外交官でありながらも正々堂々と朱舜水を忠臣として評価すべきだと主張すると述べている。さらに朱舜水のことを「欲乞師圖復明、…亡國遺民、真能不食周粟者、千古獨渠一人耳」<sup>(58)</sup>と述べ、亡命儒者の朱舜水の人格をすんなり褒めている。

また、1879年に日本を訪れた清末の思想家王韜（1828-1879）は、その『扶桑遊記』の上巻に「舜水為程朱之學、一時靡然風從、弟子多著名者。鄭芝龍客臺灣、嘗寄書舜水、欲乞師圖復明」<sup>(59)</sup>と記している。王韜は、朱舜水思想主張は深く認識してはいないが、徳川光圀のために『学宮図説』を作ったことに感服の意を表し、「規模一如中土、諸藩并起而效之。是舜水實開日本文教之先聲…」<sup>(60)</sup>と朱舜水を賞賛している。

日本へ渡った黄遵憲と王韜の二人を除外すると、朱舜水の事跡が日本社会に広がったことは、中国・台湾では知る者がいなかった。このため、中国においては、清末まで朱舜水を研究する論著は皆無に近いといえよう。二十世紀に入って、清朝の日本留

学生が朱舜水の在日事跡や関係文献を中国へ持ち帰った後になって、朱舜水研究の論著は著しく増えつつあり、中国での朱舜水研究が注目されるようになった。

その後では、作者不詳の「朱舜水傳」(1907)、馬瀛之氏の「朱舜水先生言行録」(1912)、「戊戌政変」の中心人物康有為(1858-1927)の「懷朱舜水五首」などが清朝が終わるまでの極少ない朱舜水関係の作品であった。康有為は『康南海文集』の朱舜水を偲ぶ文章で次のように述べている。

明末朱舜水先生、避地日本、徳川儒學之盛、自此傳焉。今二百五十年、徳川公國順舉改碑祭、名侯士大夫集而行禮者四百餘人、余在須磨、不能預盛典、附以五詩、以寄思仰。<sup>(61)</sup>

1910年に日中の学界関係者一同は朱舜水往生の地「駒籠別邸」(現在の東京大学農学部)にて「朱舜水日本渡來二百五十年祭」を行った。その際、東京で亡命生活を潜む康有為は参加できなかったため、七言絶句の「懷朱舜水五首」を詠んで、朱舜水を追悼した。以下はその詩である。

儒學東流二百年、派支盛大溯河先、生王難比死士擁、日本春秋思大賢。  
上續王仁傳《論語》、隱同箕子訪明夷、先生浮海能傳教、卻望神州應大悲。  
孔子已無丁祭拜、學風掃地喪斯文、我遊印度佛教絕、一線儒傳或賴君。  
徳川儒業世昌豐、楠社看碑訪落紅、十五年來重避地、每懷舜水庶高風。  
未隨褻履拜遺碑、僅自圖文寄夢思、他日海雲訪水戸、先從阡木植松枝。<sup>(62)</sup>

徳川水戸藩のみならず、日本全国に儒学を普及した朱舜水の貢献に対し、康有為は賞賛する一方、自分自身の一亡命者としての心境を朱舜水に擬え、「戊戌政変」の失敗を教訓に日本で中国の「維新」再起を図ろうとしたのである。

1911年に中華民国が成立した後、最初に朱舜水研究に関心を寄せたのが梁啓超である。彼は「黄梨洲、朱舜水乞師日本辯」(1923)を発表し、争議があった黄梨洲(宗義)と日本乞師との関連性を述べ、『海東逸史・朱之瑜別傳』の中に朱舜水の「乞師」の記載が誤りであると指摘している。<sup>(63)</sup>翌年、梁啓超は「明清之交中国思想界及其代表人物」の中に、朱舜水と黄梨洲二人の学風の異同を述べ、朱舜水は近世中日文化交流の「鴻儒」であると評価している。さらに『中国近三百年學術史』には、朱舜水の学風が「実践を主張し、虚説を排斥する」、「王(陽明)学の反動者である」と分析

した。朱舜水の学芸については、「芸事に熟練し、かつ巧思あり……器物、衣冠は共に朱舜水図絵教制の者が甚だ多い。これらの事実を觀れば、舜水は日本の精神文明界の大恩人のみならず、物質面においても、益をもたらすところが少なくない」と見做している。朱舜水は近世の日本社会に儒教の普及を開花させたのに対し、中国においては、却って「舜水学」を促進させることができなかつた。この現象について、梁啓超は「徳川の二百年で日本社会全体が儒教の国民になった最大の原動力が舜水にある」と述べ、「舜水の学問は、中国にて実行できなかつたことは中国の不幸であり、日本で実践できたことが人類の幸せである」と高く評価している。<sup>(64)</sup>

梁啓超は、朱舜水を黄梨洲・顧亭林・王船山・顔習齋と並び、「清初五大学師」と称するが、朱舜水は「清初」よりも「明末」に位置づけた方がよいだろう。

朱舜水が「中原陽九述略」の中に記載した反清の対応策を読んだ清末の知識人らは「電流が体に流されるように感動してしまい、この二十年來の政治変動への影響が極めて大きい」<sup>(65)</sup>と梁氏は語っている。ここで特筆したいことは、清末官僚の腐敗によって、反清の思潮が高まり、封じられた朱舜水の反清思想が、却って新時代に相応しい潮になった。その時代背景があつてこそ朱舜水の事跡が中国で甦つたと言えよう。

なお、1936年に完成した梁啓超氏の「朱舜水先生年譜」は朱舜水研究において最も重要な貢献である。<sup>(66)</sup>この年譜には、言うまでもなく、1600年に朱舜水が生まれてから1682年に逝去に至るまでの事跡が記載されているが、その逝世後の229年宣統三年（1911）に清朝が滅ぼされるまでが詳しく記され、大いに参考できるものである。しかし、年譜の中の「旅日唐人」と地名の紹介には、考察されていない誤植がある。例えば、梁氏は潁川入徳を陳元賛と見做し、鍋島直能を薩摩藩主とし、長崎を薩摩藩の領土とし、年代の対比の間違いもある。これらの誤植について、筆者は『朱舜水集補遺』の付録一「朱舜水先生年譜」ですべて訂正を施した。

梁氏の「朱舜水先生年譜」が公刊された後、中国の学者は徐々に朱舜水を研究し始めた。例えば、胡行之氏の「朱舜水之海外因縁」（1936）<sup>(67)</sup>郭垣氏の『朱舜水』（1937）<sup>(68)</sup>郭廉氏の「明志士朱舜水」（1937）<sup>(69)</sup>魏守謨氏の「朱舜水思想概述」（1937）などの論著がある。<sup>(70)</sup>梁繩禕氏の「梁任公先生「朱舜水年譜」」（1939）魏

守謨氏の「民族先賢朱舜水先生的思想」(1940)、郭垣氏の「民族志士朱舜水」(1951)、香港の王恢氏の「朱舜水先生之生平」(1954)、侯外廬氏の「朱之瑜的思想」(1958)、呉東権氏の「啓発日本近代文化的朱舜水」(1959)、林元載氏の「朱舜水与日本文化」(1963)、香港の劉志清氏の「朱舜水先生伝略及其学术思想」(1963)、施溪潭氏の「明末流寓日本的大儒 朱舜水」(1966)、郭魯林氏の「伝播中国文化於東瀛的朱舜水先生」(1969)、劉程遠氏の「朱舜水与日本文化」(1972)、翁咸新氏の「明季遺儒朱舜水先生」(1973)、陸離氏の「朱舜水不回帰」(上中下、1976)、盧守耕氏の「郷賢朱舜水先生及其對於日本学术思想及建国之影響」(1978)、李興盛氏の「朱舜水及其在日本」(1979)など、朱舜水の思想主張及びその明治維新への影響と関わりのある三十篇を超えた論考が発表された。

それらの内容を観れば、朱舜水の思想、学説を述べるものが大半を占めてはいるものの、呉東権氏・侯外廬氏・盧守耕氏の文章は、単なる朱舜水を愛国者か民族英雄として見做すのみであった。陳忠信氏の「朱舜水在日本伝播中国文化的貢獻」(1984)<sup>(71)</sup>、韋祖輝氏の「明遺民東渡述略」(1985)<sup>(72)</sup>などの文章は学术論文というよりも、主観的な民族の感情を入れた作品と思われる。

1990年以降、中国における朱舜水研究は徐々に学术討論の方向へ向い、1995年に朱舜水誕生395週年を記念するため、日中の学界は、彼の出身地である浙江で「中日舜水学学术研討会」を行い、朱舜水の学术思想や史蹟の考察、人物の比較及び総合評論など十八篇の論文が発表された。<sup>(73)</sup>これらの論文は『中日文化交流的偉大使者 朱舜水研究』(1998)という論文集として出版された。さらに2002年に「朱舜水誕辰400週年紀念学术研討会」が開催され、日本側の学者を招聘して、朱舜水の水戸での史料や関係文献を紹介するほか、朱舜水の実学思想及び朱舜水と水戸学の発展について討論され、『朱舜水与日本文化』(2003)の単行本が出版された。最近では、覃啓勛氏の『朱舜水東瀛授業研究』(2005)は、新資料を利用して、朱舜水と加賀藩の藩主前田綱紀との交遊関係や加賀藩での孔子学の普及について述べた論著として注目される。<sup>(74)</sup>

1980年以降、中国における朱舜水研究の内容は、凡そ下記の三つの分野に分かれている。

(1) 朱舜水の学術思想の日本社会への影響

(2) 朱舜水の思想の評論

(3) 朱舜水の実学思想

ここで、朱舜水の実学思想を中心に検討する李甦平女史の『転機与革新 論中国畸儒朱之瑜』の論著に触れたい。

李女史は中国哲学思想史を専攻している。もとより「宋明理学在日本的伝播与演变」、「儒学与日本」、「中日朱子学比較」、「中日陽明学比較」など、日中哲学思想の比較に関する論文を数多く発表している。これらの内容を観れば、主に明清の社会変遷や実学思潮の形成と発展の角度から、朱舜水の学脈根源 明清時代の実学思潮を論ずるものが多い。即ち、李女史は朱舜水思想を中国の実学思潮の変遷の脈絡に置いて考えている。

この本の序文で張立文氏は、李女史は「哲学思想を以て「実践論」を綱領と為し、政治思想の「革新論」を目的とし、経済思想の「致用論」を基礎と為し、史学思想の「尊史論」と教育思想の「社会論」を方法と為す」と述べ、全体的な実学思想のロジックで朱舜水像が成り立っていると評している。なお、最後の一章では「朱之瑜と日本文化」を主題とし、朱舜水の学風と徳川時代の朱子学、古学、水戸学との異同関係を述べている。その研究方法としては、「革新と転機」の視野から思考し、朱舜水と弟子らとの往来書簡の内容に拠って、朱舜水は「伝統を否定するのではなく、欠点を批判した上、実学を唱えて継承していく」という論点を提出し、詳細に朱舜水思想主張を検討した。

例えば、李女史は日本の学界で余り触れていない朱舜水の「経世済民」の理論を、(1)「衣食が満ちれば、礼儀が自然に生ずる基礎論」、(2)「経邦弘化、景気を以て困難に濟する実功論」、(3)「井田の法を放棄し、井田の制を真似する土地論」など、三つに分けて検討する。即ち、日常的な経済生活が道德思想の形成に大きな影響があると朱舜水は見做していると指摘している。朱舜水は「義を重んじ、利を鄙視する」、「実利実功」、「経国理民」などの学理を重んじる。この実学思想の実践から誤った清朝の「均田論」の土地政策を批判しているという。

しかし、李女史は朱舜水思想が日本思想界に影響を与えたことについては、過大

評価をしているようである。例えば、日中学界においては、朱舜水がある程度水戸藩の『大日本史』の前期修史事業に影響を与えたことは公認された事実ではあるものの、朱舜水歴史観を述べる際に下記のような論述がある。

朱之瑜は自ら『大日本史』の編纂の指導の元、「忠君愛国」の精神を完成させ、日本の国民にそれを取り入れた任務を終えた。<sup>(75)</sup>

また「朱之瑜と古学派」の論述においても、

古学派の代表人物山鹿素行、伊藤仁齋、及びその子の伊藤東涯、荻生徂徠の学術思想は、共に朱之瑜から益を受けた。<sup>(76)</sup>

と述べている。これらの論点は果たして李女史の言うままに成り立つかどうか、再度検討の余地があると思われる。とはいえ、李女史は王金林氏に次いで王茂、董根洪、潘富恩、楊憲邦、林曉明、衷爾鉅らの中国学者に影響を与え、朱舜水の実学思想について研究を進める気運をもたらした。

朱舜水の全集については、上述した朱謙之氏の『朱舜水集』が日中学界に大きな反響があった。この版本は「稲葉本」、「享保本」、「馬浮本」の『朱舜水全集』に基づいて整理され、読みやすいものである。朱氏の版本には次のような特色がある。

- (1) 過去に出版された諸版本の人名、地名、書名に句読点を加える。
- (2) 「稲葉本」に重複した書簡六通と問答一通を削除し、書簡の順序を新たに排列するほか、問答類は人物によって分類する。
- (3) 明朝の諱字と誤植を訂正した上、注釈を付け加える。
- (4) 梁啓超氏の「朱舜水先生年譜」、中国側の史料『明遺民所知録』、『姚餘鼎志』、『碑傳集補』(巻三十五)、『清史稿』(巻五 五)及び日本側の史料安東省菴宛ての伊藤仁齋書簡、伊藤東涯所蔵の「霞池省菴手簡」などの史料を増補する。しかし、「朱舜水先生年譜」は上述した誤りをそのままに翻刻しただけである。

朱謙之氏の版本は、現在中国で最も利用され、入手しやすい朱舜水全集である。

### (三) 台湾における朱舜水研究

台湾の朱舜水研究は、ほぼ中国と同時に進行した。1953年に宋越倫氏が台北の「中央文物供应社」から「傳記叢書」として『朱舜水傳』を出版したのが最初であろう。

この本は「海外孤忠朱舜水」を表題とし、かつて朱舜水の「海外経営」から日本への居留とその思想主張が日本に伝播した経緯を述べている。巻末には「在水戸謁朱舜水先生墓」の一文があり、宋氏の感想が付いている。

その後、宋越倫氏は「朱舜水を偲う」(1959)<sup>(77)</sup>「朱舜水与明治維新」(1966)<sup>(78)</sup>を発表した。また、台湾の『中央日報』では、安懐音氏が「朱舜水二三事」(1952)を、朱信発氏が「朱舜水与越南」(1954)を、朱舜水の事跡を報道した。1953年に梁容若氏は『大陸雜誌』で「読梁任公著朱舜水年譜」を、「朱舜水与日本文化」(1954)<sup>(79)</sup>を発表し、朱舜水の略伝・学説・著作などを概説した。梁容若氏は、長崎と水戸での朱舜水の事跡を紹介すると同時に、朱舜水が門生の佐佐十竹(1640-1698)、人見傳(1637-1696)、栗山潜峯(1651-1690)、酒泉竹軒(1653-1718)、藤咲僊潭(?-1762)らと交流した実態について述べている。

一方、1954年に上述した石原道博氏が発表した「鄭成功と朱舜水」、「朱舜水の諱字朱舜水談綺について」、「張煌言の江南江北経略」、「板倉氏蔵版鄭成功贈歸化朱舜水書について」などの論文が『台湾風物』で再刊されたため、台湾の学界も改めて朱舜水の研究に注目するようになった。この時期の朱舜水研究は、下記の通りである。

王賓客氏の「朱舜水之思想及其学旨」(1954)、毛子水氏の「朱舜水先生学行略識」(1955)、呉其昌氏の「朱舜水政治学術」(1955)、藍文徴氏の「朱舜水之思想」(1959)、張其昀氏の「現代日本と中国文化 朱舜水渡日三百年を前にして」(1958)、杜元載氏の「朱舜水与日本文化」(1963)、黄玉齋氏の「朱舜水与我国對於日本文化的貢獻」(1969)などが朱舜水の学風、思想ないし日本文化と関わる論著である。

ここで、特筆したいのは台湾の新聞メディアが1968年から日本における朱舜水の事跡を下記のように続々と報道したことである。

まずは、台湾の『中央日報』駐日特派員の李嘉氏が「朱舜水の孤忠与孤獨」(『中華日報』、『台湾新生報』、『聯合報』、1968年3月29日)、「明末日本乞師記」(『聯合報』、1968年4月5日)、「三百年前中日間的師弟愛」(『聯合報』、1968年4月10日)、「老死日本的朱舜水」(『中央日報』、『聯合報』、1968年4月12日)、「梅都水戸祭明儒」(『聯合報』、1968年4月19日)、「朱舜水与鄭成功」(『中央日報』、『聯合報』、1968年5月8日)、「朱舜水先生的学問思想」(『聯合報』、1968年4月18、19日)などを報道するほか、黄得時氏

は「朱舜水其人其事」(『中央副刊』、1969年5月30日)を、劉焜輝氏は「朱舜水墓瞻拜記」(『中央日報』、1969年10月7日)を報道した。

王進祥氏が『朱舜水評傳』を書いた動機は李嘉氏の報道を読んだからという。

その内容は「朱舜水之生平」、「弟友記」、「朱舜水之学問思想及影響」及び「年譜」から構成されている。「弟友記」は、中国で朱舜水と関わりのあった陳遵之、姚泰、王翊、張名振、鄭成功を紹介する一方、朱舜水は長崎居留から逝去に至るまで、日中の儒者や知識人の陳明德(潁川入徳)、獨立、陳元贊、徳川光圀、安積覺、今井弘濟、源剛伯、服部其衷、小宅生順、林春信、木下順庵らと交流した資料を、始めて台湾の学界に伝えた。勿論、その中の人物紹介の補述や再検討する必要もあるが、当時の台湾の朱舜水研究を大きく前進させたものと言ってよい。

しかし、台湾の学界では新聞の報道があったからといって朱舜水と日本との関係についての研究が盛んになったわけでもなかった。その後の約十年間、台湾の人文分野の学術雑誌には、朱舜水の論著が殆ど見られなかった。筆者が蒐集した1980年から2006年に至るまで朱舜水の研究論文は下記の如くで、極めて少ない。

- 1、頼橋本「朱舜水与日本文化」、『国文学報』第7期、1978。
- 2、陳鵬仁「朱舜水先生在日本」、『中国文化月刊』第6期、1980。
- 3、古清美「朱舜水」、『中国歴史人物広播講座專集』(台北：教育部、1982)。
- 4、戴瑞坤「一代宗儒朱舜水先生」、『逢甲学報』第20期、1987。
- 5、黄得時「礼失求諸野(下) 中華文化在日本」、『中外雜誌』第47卷第3期、1990。
- 6、何佑森「明末清初の実学」、『台大中文学報』第4期、1991。
- 7、徐興慶「江戸初期の中日文化交流 水戸藩の朱舜水招聘をめぐって」、『中日文化』第17号、1994。
- 8、徐興慶「日本に所蔵される朱舜水関係の未刊書簡」、『華岡外語学報』第2期、1995。
- 9、童長義「徳川大儒伊藤仁齋与明遺臣朱舜水」、『中国歴史学会史学集刊』第30期、1998。
- 10、林俊宏「十七世紀中日師道的典型 以朱舜水与安東守約為中心」、『鵝湖』第27



卷第5期、2001。

- 11、鄭毓瑜「流亡の風景 遊後樂園賦 与朱舜水の遺民書写」、『漢学研究』第20卷第2期、2002。
- 12、林俊宏「朱舜水と日本江戸時代朱子学派の關係」、『鵝湖』第29卷第4期、2003。
- 13、童長義「從十七世紀中日交流情勢看朱舜水と日本古学派」、高明士主編『東亞文化圏の形成と發展』（儒家思想篇、台北：台湾大學歷史學系、2003）。
- 14、徐興慶「朱舜水對東亞儒學發展定位的再詮釋」、『新訂朱舜水集補遺』（台北：台灣大學出版センター、2004）。
- 15、黃俊傑「論東亞遺民儒者的兩個難式」、『台灣東亞文明研究學刊』第3卷第1期（總第5期）、2006。

これらの論文は朱舜水の事跡を論ずるもの、日本文化と人物による交流が三篇ずつあるほか、殆どが朱舜水の世界を述べたものである。黃得時氏は朱舜水の学風と水戸学派の發展を概論し、何佑森氏は朱舜水の世界を清朝初期の実学の道德次元に置き、彼は朱熹の「道問学」を以て中国の礼学を日本に伝えたという視野から論じている。林俊宏氏、童長義氏は共に学术交流の観点から朱舜水と日本の朱子学派の木下貞幹、安東省菴、人見竹洞、林春信らと思想比較を施し、さらに朱舜水と古学派の思想異同及び関連の文献を分析している。

筆者は主に日本で発掘した朱舜水の未刊書簡を台湾の学界に紹介している。「朱舜水對東亞儒學發展定位的再詮釋」の一文は、(1) 朱舜水の海外經營や国家に対するアイデンティティー、(2) 朱舜水と水戸藩の漢学教育の發展、(3) 朱舜水と前期水戸学の形成の三つの角度から、彼が東アジア文明の發展に果たした役割を試論した。なお、鄭毓瑜女史、黃俊傑氏は朱舜水を「遺民」や亡命儒者として扱い、彼の生涯の転機は日本での才能の發揮にあると述べ、朱舜水の「政治アイデンティティー」と「文化アイデンティティー」の葛藤について論じている。

ここで、朱力行氏の『朱舜水的一生』の単行本について触れたい。著者は朱舜水第十代（朱氏二十五世）の子孫で、1961年に朱舜水逝去279年祭の際、千葉大学文学部に留学していたので、常陸太田の瑞龍山に朱舜水の墓詣でをしたり、日本の「朱舜水遺徳顕彰会」が1976年に茨城県立西山公園に「朱舜水碑」を立てた記念式典に参加

したりした関係で日本側が所蔵した朱舜水の書簡と文献を蒐集し、朱舜水の逝世300周年を記念にこの本を出版したという。その内容は朱舜水の生涯を紹介するほか、「考證及有関資料」の項目には、日本や中国の朱舜水研究の關係文献を台湾の学界に紹介し、新たな一ページを開いた。しかし、この本は年代記述や地理概念の錯誤がある。例えば、九州福岡県の「柳川」を「関東」と記したり、「水戸」を「京都」と記載してしまい、これらを訂正しなければならない。<sup>(80)</sup>

なお、台湾では朱舜水を対象に研究した学位論文が稀であるが、田原剛氏の『朱舜水研究』には、朱舜水の生涯の事跡や人格の養成を述べるほか、彼の学術的な理念、倫理思想、政治と教育主張などの思想体系のその後世への影響について分析している。しかし、新資料や關係文献の入手が容易ではないため、先行研究を踏襲したところが多く、新理論の創出が少ない。王瑞生氏の『朱舜水學記』は、朱舜水の生涯、交遊、學術思想及び後世への影響の四部分から構成され、前掲の頼橋本氏、田原剛氏の論文構成に近い。王氏は朱舜水の學術思想の背景を經学、哲学、史学、政治哲学に分ける。研究方法としては朱舜水の書簡を引用し、主に彼の学説と思想の特色を中国歴代の儒者と比較研究することに重点を置く。しかし、第四章の「朱舜水对後世的影響」には、単なる「安南供役紀事」、「大南実録」の資料に拠るのみで、当時安南の文治教化が皆朱舜水の学説に影響されたと論述したが、立証できる文献が足りないように思われる。

二十世紀に入って、清末の政權腐敗に際し、かつて忠臣として扱われた朱舜水の「反清復明」意識は、確かに当時の改革派の康有為、梁啓超、さらに革命派の孫文らの深い反響を呼んだ。そこで王氏は孫文の革命の原動力が朱舜水の「反清復明」意識から湧いてきたと指摘したが、果たして朱舜水は辛亥革命の思潮までに影響があったのか、王氏は關係資料の引用や立証できる論点は表していない。

上述したように、台湾の学界において過去二十六年間に亘っての朱舜水研究としては、凡そ十五本の論文及び若干の単行本、学位論文のみが見られる。日本や中国よりも遙かにその関心を寄せていないように思われる。しかし、1986年に大量の朱舜水關係のオリジナル諸書簡が公刊された後、筆者は『朱舜水集補遺』（1992）の出版に続き、2004年に「朱舜水对東亞儒学發展定位的再詮釈」の論考と「朱舜水研究参考文献」

(1、伝記資料・全集・詩文。2、単行本(学位論文を含む)。3、雑誌論文。4、日中の新聞関係記事)を付け加え、『新訂朱舜水集補遺』として再刊したのである。

#### (四) アメリカにおける朱舜水研究

筆者の『新訂朱舜水集補遺』とほぼ同時に刊行した呂玉新氏の「有関朱舜水研究目録」(2004年11月)の「英文文献」項目には、書籍12点、論文10点の資料が収録され、多少アメリカ側の朱舜水研究の概観が覗える。

まず、1957年にRobert Neelly Bellah氏の『*Tokugawa Religion: The Values of pre-Industrial Japan*』はアメリカの早期の朱舜水研究であろう。<sup>(81)</sup>1958年にコロンビア大学のHerschel Webb氏は博士論文『水戸学派早期の思想と作品』で水戸学派と朱舜水との関係を述べている。<sup>(82)</sup>1968年にHerschel Webb氏は、再度『徳川時代の日本帝制』を単行本としてコロンビア大学から出版した。<sup>(83)</sup>

また、六十年代から九十年代までに、次の論著がある。David Magarey Earl氏の『徳川時代の日本天皇、国家及びその政治思想』(1964)<sup>(84)</sup>Ronald Philip Dore氏の『徳川時代の教育』(1965)<sup>(85)</sup>Conrad Davis Totman氏の『徳川幕府の政治』(ハーバード大学出版、1967)<sup>(86)</sup>Helen Pui-king Ku氏は『朱舜水：生平と影響』(1972)を、セント・ジョーンズ大学の博士論文として出している。<sup>(87)</sup>William Theodore De Bary氏とIrene Bloom氏共編の『理学と実学 新儒学と実学』(1979)<sup>(88)</sup>J. Victor Koschmann氏の『水戸学 日本徳川後期の改革と反乱』(カリフォルニア大学出版、1987)<sup>(89)</sup>Harry D. Harrotunian氏の『徳川鎖国の理論と理想』(シカゴ大学出版、1988)<sup>(90)</sup>Kate Wildman Nakai氏の『幕府政治：新井白石と徳川の法治基礎』(ハーバード大学出版、1988)<sup>(91)</sup>Marius B. Jansen氏の『徳川世界から中国を見る』(1992)<sup>(92)</sup>William Theodore De Bary氏の『研究と翻訳：黄宗羲の『明夷待訪録』』(1993)<sup>(93)</sup>さらに、Yuxin Lu氏は『孔子、朱舜水及び徳川時期の日本建国の起源』(1998)と題し、セント・ジョーンズ大学の博士論文を完成した。<sup>(94)</sup>

以上を觀れば、アメリカの朱舜水研究は盛んではないが、その研究の方向を知ることが出来る。つまり、朱舜水と徳川時代の政治、思想、教育の諸問題や理学と実学の全体的発展が、どのように関わっていたかが、やはりその焦点になっている。呂玉新氏の紹介を通じて、従来アメリカにおける朱舜水の研究文献の不足を少し埋めるこ

とが出来たと言えよう。

### 三、問題意識 学術研究と政治的訴求の狭間で

南明政権は清朝に対する反抗のプロセスにおいて、朱舜水は忠臣、義士と看做され、特に彼は反清復明活動及び「日本乞師」として微妙な政治問題に関わる人物なので、満清政権に歓迎されない人物であった。このため、清朝支配下の中国では朱舜水の故郷の浙江省餘姚県でさえ、彼を優秀な儒者として尊ぶことなく、彼の関係資料が殆ど封鎖されていたと考えられる。

湯壽潛（1857-1917）氏は『舜水遺書』の序文に「故に康熙・雍正以降、遺民を述べる者は、往々にして先生のことを知らず」<sup>(95)</sup>と書いているように、康熙・雍正年間（1662-1735）の中国では、明朝遺臣の朱舜水の存在を知らなかった。また、光緒二十五年（1899）の『餘姚県志』（巻23、朱之瑜）の記載には「同治の際、先生（朱舜水）の族孫の衍緒ができ、徒弟の湛然が日本への使節団に就いて、その軼事を求める際、日本人が編集した『全集』（28巻）を持ち帰ったことによって、先生の生涯の始終が考察できた」<sup>(96)</sup>と記している。朱舜水の遺著は初めて中国側に伝えたのが、清朝の同治年間（1862-1874）以降であると推測できる。

なお、錢明氏は「朱舜水事跡回伝故国考之一」でも朱舜水の族人朱湛然が日本に渡航したことによって、同治十一年（1872）に『朱舜水先生文集』（水戸本28巻）を持ち帰ったと裏づける。<sup>(97)</sup>

前述の湯壽潛氏の序文にも以下のように記されている。

既革命、先生族裔復往日本躬拜其墓、彼中多闕」碩理先生遺言、浙人之私淑者、先於杭地立一學社、堅推壽潛為之長、請建專祠於會議不可。壽潛乃與浙路董會諸君、特建祠於清泰門側、而謀分其所藏器物於日人、歸而為衣冠之墓。

1912年6月に朱舜水の第十一世の子孫朱輔基氏は日本の朱舜水記念会主催の「朱舜水渡日二百五十年祭」に出席した後、中国側が朱舜水の遺作、遺物の整理を着手し、湯壽潛を始めとする地元の人が故郷の浙江で衣冠塚や祠堂を建て、朱舜水研究を展開するようになったという。

『舜水遺書』(1913)が刊行されたのは、辛亥革命が終わり、清朝が滅ぼされ、中華民国が誕生した時期である。日本では明治時代が終わり、大正の初期であった。この東アジアの新時代の到来に、湯壽潛氏は朱舜水の「全集」を「遺書」に改め、朱舜水は南明の遺臣であったことを特に強調し直そうとする意向が考えられる。

錢明氏の「朱舜水事跡回伝故国考」は、辛亥革命の前夕に朱舜水の遺著が続々と中国に伝えられた状況を詳しく述べている。<sup>(99)</sup>この現象について、同じく浙江出身の魯迅(周樹人、1881-1936)は、その『墳・雜記』に「当時の清末には、一部分の青年の心の中に、革命の思潮が燃え上がり、「復仇」や「反抗」の声を叫ぶと、その共鳴を得やすい。……一部分の青年は明末遺民の著作や満州人の残酷な記録などを専念して収集した。……だから『揚州十日記』、『嘉定屠城記』、『朱舜水集』、『張蒼水集』など、すべてが翻刻した」と分析し、<sup>(100)</sup>また、「清朝初期の「文字獄」は末期になって、新たに提起され、……一部分の留学は、競って日本から文証を運び帰った」と述べ、<sup>(101)</sup>清末の日本留学生は図書館で明末遺民の著作を蒐集して懸命に中国へ送り帰った目的は、忘れかけていた清朝に対する怒りの「旧恨」を復活させ、反清革命の成功に一助しようとするところにあると指摘している。

辛亥革命後約百年が経った今日でも、中国・台湾では朱舜水研究に携わる中で、主観的な民族情感や政治訴求を入れ、自分のイデオロギーから抜けられない著作がしばしば見られる。即ち、清朝の腐敗政権を打倒する改革、または革命を前提に、かつて朱舜水の「反滿抗清」の思潮は、近代中国の知識人の康有為、梁啓超、章太炎、孫文、李大釗、魯迅らに、ある程度の影響をもたらしているが、彼らは朱舜水思想主張に対し、それぞれの受け止め方が異なるので、ナショナリズム的な立場から、朱舜水の遺民の事跡を、主観的な政治の訴求と結び付けた論説も少なくない。例えば、辛亥革命の際、民主主義の革命色彩を強く持つ李大釗氏の「朱舜水之海天鴻爪」(1913年4月1日と5月1日)の文章は、朱舜水の反清復明活動や海外での遺民事跡を、中国近代革命思潮の先駆と見做し、中華を振興する愛国主義の継承であると称えている。

中国人民大学の楊憲邦氏は「弘揚朱舜水堅貞愛國、復興中華、經世致用的実学啓蒙哲学思想的精華」の一文に、1894年に孫文は「興中会」を成立した際に、常に朱舜水の反清革命の言論を引用したと言い、孫文が思案した「驅逐韃虜、恢復中華」の革命

綱領は朱舜水の「誅滅清虜、復興中華」とは一脈相承のものであったので、近代中国の民主革命の波を引き起こしたという。<sup>(102)</sup>さらに復旦大学の趙建民氏の「継往開来 写華章 朱舜水研究的回顧与前瞻」は下記のように結論付けた。

今日、日中関係の発展において、もし双方が共に「相手の立場に立って、物事を考え、誠心誠意で交流する」という態度を持てば、現実が生じた双方の矛盾、摩擦、衝突などは避けることが完全にできないものではない。並大抵のものではない努力によって築き上げた日中友好関係は、必ずや末永く健康的な方向へ発展していく。<sup>(103)</sup>

また、趙建民氏は拙著『朱舜水集補遺』を紹介するのに、筆者のことを故意に「中国の台湾留学生」と述べているが、<sup>(104)</sup>これは中国の政治人物が自分のイデオロギーを混入させるやり方のようなもので、決して学術研究にあるべきことではないように思われる。また、陳増輝氏は「朱舜水教育思想簡論」の中で、「中国では、朱舜水のことを学者や庶民に知られていないが、彼は近代中国に大きな影響があった。彼は日本での「復国活動」が、「同盟会」の結社に多大な影響を与えた」<sup>(105)</sup>と言及するほか、李鳳全氏は「舜水学」が日中文化交流に貢献したモデルを、1894年の日清戦争ないし1931年から1945年までの日本の中国への侵略戦争以来の文脈におき、日中間にある「侵略」と「反抗」の問題を解消しようと思考している。<sup>(106)</sup>

台湾では、王瑞生氏は『朱舜水学記』の結論で、朱舜水の学説を、反共主義の原理や三民主義を以て中国を統一する思想ルーツと見做し、朱舜水の実践哲学の思想主張を「蒋公中正先生（蒋介石）の反共の指針である」と無理に結びつけた。これらの論説は、朱舜水の事跡やその実学思想が日本社会に開花したこと、さらに朱舜水の新資料を紹介していくうち、著者個人のイデオロギーと結び付けて考えたもので、明らかに学術研究の範疇を超えたものと言わねばなるまい。

## 結論 朱舜水研究の新地平

以上、朱舜水研究を主に東アジアという観点から考察してきた。過去、約百年近くの朱舜水研究を振り返って見れば、数量方面で研究業績が豊富に蓄積されてきたが、

研究の焦点や方向の差異が大きく分かれる。筆者は、蒐集と分野の分類ができた単行本と雑誌論文に限って、下表の如く、その数を統計して見た。

分野別による朱舜水研究の統計一覧表（1900-2006）

著述 領域	国別	日 本		中国大陸		台 湾		合 計		備 註
		専書	論文	専書	論文	専書	論文	専書	論文	
哲学		2		5	5		1	7	6	
思想		5	11	2	17	5	7	12	35	香港<1>
政治(乞師活動を含む)		1	17	2	15		4	3	36	香港<1>
学芸(実学理論を含む)		2	3	2	12		3	3	18	
人格教育				1	6			1	6	
日本漢学							1		1	
朱子学関係		1		2	1			3	1	
陽明学関係				2	1	1		3	1	
儒学史(概論を含む)		4	1	1	4	3	2	8	7	
史学と佛学観			1			1		1	1	
中日関係(交通)史			1			3		3	1	
明朝遺民				1	10	2	1	3	11	
人物交流		8	17		7	1	3	9	27	
中日文化交流史		4	1	5	3	3	3	12	7	
日本文化への影響		2	3	3	12	3	7	8	22	香港<1>
徳川光圀と水戸学		26	9	2				28	9	
水戸学と明治維新		3	2	1	1	1	2	5	5	
湯島聖堂(積奠を含む)		4	1					4	1	
水戸彰考館		2	2					2	2	
年譜			2		3	1	2	1	7	
朱舜水綜論(評伝を含む)		4	29	3	37	18	6	25	72	香港<1>
朱舜水全集(史料を含む)		43		21		23		87		
総 計		111	100	53	134	65	42	228	276	

朱舜水全集（資料を含む）については、日本が43篇で、総数の半分である。次に台湾が23篇、中国が21篇となっている。台湾は中国より多い原因は、翻刻の朱舜水全集や新資料の紹介が多いためである。

単行本について、日本では68冊（43種類の朱舜水全集を除く）がある。そのうち、徳川光圀と水戸学の発展について26冊（38%）がある。次は、人物交流が8冊、思想

が5冊、儒学史（概論を含む）、日中文化交流史、湯島聖堂（積奠を含む）、朱舜水の総合評論が各4冊で、その他は諸分野にまたがっている。雑誌論文について、総数が100篇のうち、朱舜水の総合評論が最も多くて29篇になっている。次は政治（乞師活動を含む）と人物交流が各17篇、思想が11篇、徳川光圀と水戸学の発展が9篇、学芸（実学理論を含む）、日本文化への影響が各3篇となっている。

中国での単行本は32冊あり（21種類の朱舜水全集を除く）、分野別で見ると、哲学と日中文化交流史が5冊ずつある。次は日本文化への影響と朱舜水の総合評論が各3冊となっている。雑誌論文は最も多くて、総数は134篇に達している。そのうち、朱舜水の総合評論の37篇（27%）が最も多い。次は思想が17篇（13%）で、政治（乞師活動を含む）が15篇（11%）で、学芸（実学理論を含む）と日本文化への影響が各12篇、明朝遺民が10篇、人物交流が7篇、人格教育が6篇、哲学が5篇、儒学史（概論を含む）が4篇、日中文化交流史と年譜が各3篇となっている。

台湾での単行本は41冊あり（23種類の朱舜水全集を除く）、中国より10冊多い。分野別で見ると、朱舜水の総合評論が最も多くて18冊（43%）ある。次は思想が5篇（13%）で、儒学史（概論を含む）、日中関係（交通）史、日中文化交流史、日本文化への影響が各3篇となっている。雑誌論文は総数42篇で、最も少ない。思想と日本文化への影響が各7篇で、次は朱舜水の総合評論が6篇、政治（乞師活動を含む）が4篇、学芸（実学理論を含む）と人物交流、日中文化交流史が各3篇、水戸学と明治維新、年譜が各2篇となっている。

朱舜水は反清復明を抱える明朝の遺臣と自称し、二十二年間（1659-1682）に亘る日本での居留後、近世日中文化交流及び前期水戸学の発展に大いに貢献した亡命儒者であると位置づけられている。しかし、上述した朱舜水の研究内容は、総合評論が多いとは言え、他の人物との思想比較や儒学の受容とその排斥などの課題研究について、もっと検討する余地があるように思われる。

筆者は補遺補欠で、上述した文献や先行研究の内容を検討したが、漏れたり、補述すべき文献があると思う。これからの朱舜水研究に当たっては、前述のように著者個人が辛亥革命や日中間の侵略、戦争問題などのイデオロギーと結び付いた問題意識の設定をせずに、客観的、実証的な視野から日中の学術の比較研究が進展することを望



んで止まない。

筆者は1984年に日本へ留学した後、積極的に朱舜水の新史料を発掘、解読、注釈を施し、その補遺を公刊すると同時に朱舜水研究に携わって、早くも二十二年が経った。これからも些かな経験を生かして、朱舜水研究が発展可能な方向を考えつつ、朱舜水と同時代の日本知識人との思想比較、特に遺民としての彼が東アジア文明の発展において、どのような役割を果たしたのかを考えるために、下記の課題を提起して稿を終えたい。

### (1) 朱舜水新史料の再発掘とその解読

もともと水戸の彰考館に所蔵された朱舜水と徳川光圀、朱舜水と水戸藩の弟子と往来書簡などのオリジナル資料は、二次世界大戦の戦火で焼けたとはいうものの、数少ない資料のマイクロフィルムが作製され、茨城県立図書館や東京の「国文学研究資料館」に所蔵されている。例えば、『文恭君遺熏』（原彰考館蔵）、『水府系纂』（原彰考館蔵）、『朱舜水遺書目録』（原彰考館蔵）、『朱舜水関係目録』（原彰考館蔵）、『水戸纂録』（茨城県立図書館蔵）、『水藩紀事略』（茨城県立図書館蔵）などの文献がある。これらの資料の閲覧や貸し出しなど手続きやその後の解読などは、いずれも時間がかかることだが、今後、朱舜水研究が進むべき方向の一つである。特に従来朱舜水の筆跡は多岐に渡り、書簡の日付がなかったりする場合がしばしばあり、資料の属性や年代の比定を施した上、その研究価値を解説する必要がある。同分野の専門家の共同参加によって、学界に朱舜水研究の新素材の再提供を図らなければならない。

### (2) 朱舜水研究の新方向を考える

- 1、従来の研究は、朱舜水と安東省菴の交遊関係とその乞師意識の問題に偏っている。しかし、長崎の居留時代の朱舜水と頼川（陳）入徳、獨立（戴曼公）、町年寄の高木作右衛門との往来関係や朱舜水の孫朱毓仁、一時的に朱舜水の後継者と名乗る張斐なる人物、さらに江戸で幕府儒官の人見竹洞との思想交流などの諸問題は検討すべき課題であろう。
- 2、筆者の『新訂朱舜水集補遺』の中に、朱舜水の日常生活を細かく語る新書簡が

多く収録している。これらの書簡の内容から、朱舜水と長崎奉行、唐通事、黄檗の禅僧や長崎居留の中国人趙文伯、柳如琢との交遊関係を通じて、彼の居留生活や経済情況が窺える。同時に朱舜水の人格特質や日本観そのものが見出せるだろう。

- 3、朱舜水の思想についての検討は、その宋明理学に対する見解や実践哲学思想及び史学、儒学思想、また日中文化交流への貢献の部分に集中している。朱舜水的全集中に彼が仏教思想を激しく批判する箇所が多々あるにもかかわらず、朱舜水の仏学観や日本の儒者らとの仏学思想の比較研究は、皆無に近いと言ってよい。そこで朱舜水の仏学思想の脈絡から、彼と日本の儒者らの仏学思想の異同と互いの影響を見出すのは、試論を行える課題である。
- 4、筆者は佐賀県鹿島市立図書館で発掘した『長崎存誠筆談』（写本）を利用して、肥前鹿島藩主の鍋島直條及びその儒臣の菅存誠が積極的に中華知識を摂取した経緯を分析した。菅存誠は、貞享年間（1684-1687）に長崎に渡来した中国人の張殿秦らとの筆談の内容、及び張殿秦らと徳川光圀の儒者招聘との関連性があるように思われる。この研究課題は、朱舜水関係の新史料の出現によって、徳川光圀の儒者招聘の真相やその歴史的な意義を明らかにできる可能性がある。
- 5、思想比較の角度から考えてみると、古学派の代表人物山鹿素行、伊藤仁齋、荻生徂徠や幕府の儒官林鵝峰（春齋、1618-1680）、政治家の新井白石らは、直接に朱舜水と交遊していなかったが、彼らは共に近世日本思想界に強い影響力を及ぼした人物なので、朱舜水の存在とその思想主張に対し、それぞれの反応が異なったり、批判したりしたことがある。例えば、山鹿素行の『聖教要録』（寛文六年、1666）には、宋代の儒学を批判し、古学を学ぶべきであると唱えている。茨城県立図書館所蔵の『徂徠問答書』には、安積覚と荻生徂徠との往來書簡が収録され、荻生徂徠の朱舜水の思想及び教育の主張に対する細かい詢問が記載されている。前述の藤沢誠氏の「朱舜水の古学思想と我が古学派の関係」、金培懿女史の「朱舜水於江戸儒学史上所起之作用 由其与古学派之関係談起」、鄧紅氏の「舜水学的「古学」傾向与儒学的過濾」及び童長義氏の「從十七世紀中日交流情勢看朱舜水与日本古学派」などの論著は、この分野の研究成果なの

で、参考に値すると共に、さらなる新資料の発掘及び研究の深化と創造的な発展が期待される。

### (3) 国際共同研究の統合と促進

呂玉新氏が「これらの朱舜水と徳川思想主張との重大な相互影響のあった原始原稿は、水戸市内の各資料館に所蔵されているが、殆どの研究者は、その詳細が未知である」<sup>(110)</sup>と述べているように、未発掘の朱舜水関係資料は、殆ど日本側に所蔵されているといつてよい。これらの新資料の大半は古文書なので、内容を正確に解読するのに日本側の同分野の専門家に協力を求めなければならない。例えば、最近倉員正江氏が発表した「『舜水先生文集』編纂事情(一) 『大日本史』編纂記録を中心に」論文は、京都大学図書館と茨城県立図書館に所蔵した「『大日本史』編纂記録」の古文書を解読して、研究と評論を施したものである。<sup>(111)</sup>また、東京大学で開かれた「水戸学をいまどう見るか 『大日本史』刊行百周年を迎えて」(2006.10.28)と題するシンポジウムにおいては、「『大日本史』と水戸学」(尾藤正英)、「水戸藩の水利事業と朱舜水」(松田吉郎・神吉和夫)、「水戸学の「国体」論」(前田勉)、「『大日本史』の続編計画をめぐる問題」(鈴木暎一)などの論文が発表され、朱舜水を含む水戸学の諸問題を再検討したことが注目される。<sup>(112)</sup>

一方、朱舜水が書いた書簡や筆語は種類が多いものの、字跡がよく乱れ、常に中国の古典を引用するため、正確な文意の解読とその後の校勘や注釈などの作業は中国、台湾の専門家に頼る必要がある。また、欧米における朱舜水研究の焦点はどこまで進んだのか、新たな観点があるのかという課題を通して従来の「東アジア」の角度から「世界から朱舜水を考える」という視野へその研究の脈絡を考え直す必要もある。したがって、将来の朱舜水研究の発展は、国際共同研究の統合の方向に促進されるべきであり、この新時代に応じ得る共同研究の実現にこそ、より広い視野による朱舜水研究の成果が期待される。

〔註〕

(1) 1901年高瀬武次郎の「朱舜水」『史学界』(第3-8、11、12期)は、その濫觴であろう。

(2) 朱舜水全集の最初の版本『明朱徵君集』(10巻)は加賀藩儒の源(五十川)剛伯(?-1699)

が貞享元年（1684年）に編纂され、通称は「加賀本」という、但し、この原稿は付梓していない。出版物として初めて公刊したのは正徳五年（1715年）に水戸藩主の徳川光圀が編輯、その息子徳川綱條が校刻した『朱舜水先生文集』（28巻）である。2006年現在、朱舜水的全集は計九種の版本が世に出されている。詳しくは徐興慶編著『新訂朱舜水集補遺』（台北：台湾大学出版センター、2004年）自序、頁XIVを参照されたい。

- (3) 徐興慶編注『朱舜水集補遺』（台北：学生書局、1992年）。
- (4) 林俊宏『朱舜水在日本的活動及其貢獻研究』（台北：秀威資訊公司、2004年）。
- (5) 徐興慶編著『新訂朱舜水集補遺』、頁353-393。
- (6) 呂玉新「有關朱舜水研究目錄、Collected Bibliography on Study of Zhu Shunshui」、『漢学研究通訊』（台北：漢學研究中心、2004年11月）第23卷第4期（總第92期）頁21-37。
- (7) 朱力行『朱舜水的一生』、頁117-130。
- (8) 拙稿「中日文化交流における朱舜水研究」、『台湾日本語文學報』第5号、1993年、頁241-261。
- (9) 久信田喜一著・徐秀姿訳「水戸的朱舜水研究現況」、町田三郎等『朱舜水与日本文化』（北京：人民出版社、2003年）頁57-63。
- (10) 趙建民「継往開來写華章 朱舜水研究的回顧与前瞻」、前掲町田三郎等『朱舜水与日本文化』、頁64-74。
- (11) 今井弘済・安積覚「舜水先生行実」、朱謙之『朱舜水集』（北京：中華書局、1981年）付録1、伝記、頁619。
- (12) 『朱舜水先生文集』は正徳五年（1715年）に刊行した。その題書には「門人權中納言從三位源光圀輯、男權中納言從三位源綱條校」が記されているほか、巻首には福岡藩儒の安東守約（省菴）の序文がある。
- (13) 倉員正江「『舜水朱氏談綺』編纂をめくって」、『融合文化研究』第4号、2004年。
- (14) 前掲朱謙之『朱舜水集』巻7、書簡4、頁169。
- (15) 松本純郎『水戸学の源流』（東京：朝倉書店、1945年。国書刊行会が1997年に復刻）頁238-239。
- (16) 前掲名越時正『水戸学の研究』（水戸学集成六、京都：神道史学会、1975年。国書刊行会が1997年に復刻）頁258。
- (17) 名越時正「水戸学派と明末志士」、前掲『水戸学の研究』、頁258-259。
- (18) 高須芳次郎「水戸学の源流」、『水戸学全集 四』（東京：日東書院、1933年）水戸義公烈公集解題、頁2。
- (19) 同上注、頁3。
- (20) 同上注、頁3。
- (21) 同上注、頁2-3。
- (22) 同上注、頁3-4。
- (23) 今井弘済・安積覚「舜水先生行実」、前掲朱謙之『朱舜水集』、頁624。
- (24) 須藤敏夫『近世日本積奠の研究』（京都：思文閣、2001年）頁96。
- (25) 前掲須藤敏夫論文。
- (26) 『日本精神文化大系水戸時代編（下）』（東京：日本図書センター、2001年）巻8、頁46。
- (27) 稲葉君山「朱舜水考 朱舜水の諸友・陳明德」（十）『日本と日本人』、1908年。
- (28) 国府犀東「朱舜水と安東省菴」、『日本と日本人』第580特集。

- (29) 朱舜水の乞師意識について、今井弘濟・安積覚編纂の「朱舜水先生行実」には、「蓋先生所以屢至日本者、欲以王翊為主將郷導、而借援兵也。然在日本未嘗露情洩機」と記されている。前掲朱謙之『朱舜水集』、頁614。
- (30) 『先哲叢談』巻2、「朱之瑜」。前掲朱謙之『朱舜水集』付録1、伝記、頁635。
- (31) 朱舜水の乞師意識について、『新井白石全集 五』に収録されている『白石先生紳書』巻2には、「水戸に來りし朱舜水の死し時、金三千兩有て中納言殿へ返し献ぜられし也。世に在しほど毎年に費なく家事を約にせしを鄙吝なるは唐人の習也と云し者も有き、朱氏は志有てかく有しと也。いかにもして再び本国に歸りて義兵をも拳ん時の料にかく有しと也。哀れ成事也。常に申されしは本朝の如くにはあらず唐山は黄金乏しければ我朝の黄金を以て彼国に用ひんには百倍にもあたるべしと申されしと申されしとぞ舜水の世に在しほどは清朝の政事に缺る所なかりしかば時いまだ至らぬと思ひみられし也べし。」と記されている。頁643-644。
- (32) 前掲朱謙之『朱舜水集』巻7、書簡4、頁162。
- (33) 同上注、頁194。
- (34) 例えば、童長義「徳川大儒伊藤仁齋与明遺臣朱舜水」、『中国歴史学会史学集刊』第30期、1998年。童長義「從十七世紀中日交流情勢看朱舜水与日本古学派」、高明土主編『東亞文化圈的形成与発展』（儒家思想篇、台北：台湾大学歴史学系、2003年）。金培懿「朱舜水於江戸儒学史上所起之作用 由其与古学派之關係談起」、『中日文化交流的偉大使者 舜水研究』（北京：人民出版社、1998年）。鄧紅「舜水学的「古学」傾向与儒学的過渡」、『朱舜水与日本文化』（北京：人民出版社、2003年）などがある。
- (35) 例えば、海老澤有道・緒方富雄・杉本勳・沼田次郎らは「洋学」や「蘭学」の実学面の日本社会への影響について検討している。また、源了圓氏の実学に対する解釈は：（1）知性に対する信頼の念をもち、それに基づいて社会の因習的考え方や価値観を批判し、そのことによって人間の精神や社会的あり方を解放すること。（2）この知に基づいて自然の法則を知り、それを利用する技術を身につけて、人間の生活を豊かにし、社会の生産力を向上すること。（3）この知に基づいて人間と社会との関係においてより合理的なシステムを工夫し、人間をその「身分」の桎梏から開放して、その「能力」が十分に発揮できるようにし、また社会の恵まれない階層への配慮を忘れず、できるだけ社会の不平等がなくなるような工夫をすること。（4）人間の尊厳に対する自覚が高まり、それとともに自己の帰属する社会や国家を超えた普遍的価値にめざめて、普遍主義の立場に立つこと。朱舜水の実学思想は、上述の理論に当てはまるところがある。詳しくは源了圓「開明思想としての実学」、『日中実学史研究』（京都：思文閣、1991年）頁5-6を参照されたい。
- (36) 「舜水先生行実」、前掲朱謙之『朱舜水集』付録1、頁624。
- (37) 日本の学者が九本、中国の学者が八本ある。共に源了圓・末中哲夫共編『日中実学史研究』に収録されている。
- (38) 前掲『日中実学史研究』、頁270-271。
- (39) 前掲『日中実学史研究』、頁356、426。
- (40) 前掲『日中実学史研究』、頁406。
- (41) 徳田武『近世日中文化交流史の研究』（東京：研文出版、2004年）。
- (42) 「向陵」とは、1912年6月2日に「朱舜水記念会」が朱舜水渡日250周年を記念するため、その終焉之地（今東京大学農学部のキャンパス内）に建てた「朱舜水先生終焉之地」の碑である。

- (43) 上記の論文は、いずれも石原道博氏の『明末清初日本乞師の研究』(東京：富山房、1945年)に収録している。
- (44) 前掲『新訂朱舜水集補遺』付録3、「朱舜水研究参考文献」。
- (45) 前掲今関天彭「朱舜水の人物附張非文」、頁115。
- (46) 井上哲次郎「朱舜水の事蹟及び学説」、『日本朱子学派の哲学』(東京：富山房、1906年)並びに拙稿「朱舜水の学説について 柳川古文書館所蔵の書翰を中心に」、『九州中国学会報』第29巻(1991年)などを参照されたい。
- (47) 石原道博『朱舜水』(人物叢書、東京：吉川弘文館、1989年新装版) 頁192。
- (48) 「鄭成功贈歸化朱舜水書」は『通航一覧』巻213、唐国部9「鄭氏援兵願付書」に収録されている(板倉氏蔵版)。
- (49) 「舜水先生行実」、前掲朱謙之『朱舜水集』、頁624。
- (50) 同上注。
- (51) 同上注。
- (52) 「與奥村庸禮書」、前掲朱謙之『朱舜水集』巻8、書簡5、頁257。
- (53) 「舜水先生行実」、前掲朱謙之『朱舜水集』、頁624。
- (54) 拙稿「鎖国後長崎來航の明人について 張斐を中心に」、『九州史学』第95号、1989年。
- (55) 詳しくは前掲の「朱舜水の学説について 柳川古文書館所蔵の書翰を中心に」を参照されたい。
- (56) 黄遵憲『日本国志』巻2、「鄰交志」上、頁3。
- (57) 黄遵憲著・実藤惠秀等訳『日本雑事詩』(東京：平凡社、1968年) 71、「朱舜水」、頁118。
- (58) 黄遵憲・鍾叔河輯校『日本雑事詩廣注』(湖南：湖南人民出版社、1981年) 頁121。
- (59) 王韜『扶桑游記』上、光緒六年(明治十三年、1880年)刊行。沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』(台北：文海出版社影印本、1972年)第26輯、『扶桑游記』、頁58-59。
- (60) 同上注。
- (61) 康有為『康南海文集』、1914年刊行。前掲沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』第80輯、『康南海文集』。
- (62) 同上注、頁513。
- (63) 1884年に翁洲老民が刊刻した『東海逸史・朱之瑜別傳』には、朱舜水の「乞師」について、「御史馮京第之自湖州軍破也、間關入四明王職方翊軍中。時內地單弱、欲藉海外之師為響應。京第勸斌卿乞師日本。斌卿因命弟孝卿副京第往、之瑜從之。撒斯瑪王許發罪人三千及洪武錢數十萬。京第光歸、之瑜留、而師不果出」と記されている。そのほかに「明遺民所知傳」、「皇民遺臣傳」には、同じ誤った記載がある。詳しくは今関天彭「日本流寓の明末諸士」と石原道博『朱舜水』、頁257を参照されたい。
- (64) 梁啓超『中国近三百年學術史』(天津：古籍出版社、2003年) 頁92-95。
- (65) 梁啓超『中国近三百年學術史』(台湾：中華書局、1943年) 頁84。
- (66) 梁啓超「朱舜水先生年譜」、『飲冰室全集』に収録している。1957年に台湾の中華書局からも単行本として出版している。前掲朱謙之『朱舜水集』にも付録として収録している。
- (67) 胡行之「朱舜水之海外因縁」、『越風』第13期、1936年。
- (68) 郭垣『朱舜水』。1964年に台北の正中書局から再版されている。
- (69) 郭廉「明志士朱舜水」、『史地半月刊』第1巻第11-12号、1937年。
- (70) 魏守謨「朱舜水思想概述」、『論学』第2期、1937年。

- (71) 陳忠信「朱舜水在日本傳播中國文化的貢獻」、『華僑史研究論集』(上海：華東師範大學出版、1984年)。
- (72) 韋祖輝「明遺民東渡述略」、『明史研究論叢』(江蘇：古籍出版社、1985年)第3輯。
- (73) 「中日舜水學學術研討會」の内容については、横畑茂明氏が『九州中國學會報』第34卷(1996年5月)に紹介した報告を参照されたい。
- (74) 覃啓助『朱舜水東瀛授業研究』(北京：人民出版社、2005) 頁229-297。
- (75) 前掲李甦平『轉機与革新 論中國崎儒朱之瑜』、頁198。
- (76) 同上注、頁161。
- (77) 宋越倫「朱舜水を偲う」、『斯文』第24号、1959年。
- (78) 宋越倫『中日民族文化交流史』(台北：正中書局、1966年) のちに熊谷治氏が日本語に翻訳して出版した。(東京：弘文堂、1970年)
- (79) 梁容若「読梁任公著朱舜水年譜」と「朱舜水と日本文化」は、『中国文化東漸研究』現代国民基本知識叢書第4輯(台北：中華文化出版事業委員会、1956年)に収録している。
- (80) 前掲朱力行『朱舜水的一生』、頁38、80。
- (81) Robert Neelly Bellah, *Tokugawa Religion : The Values of pre-Industrial Japan* (Illinois: The Free Press, 1957).
- (82) Herschel Webb, "The Thought and Work of the Early Mito School," Doctoral dissertation, Columbia University, 1958.
- (83) Webb, Herschel, *The Japanese Imperial Institution in the Tokugawa Period* (New York: Columbia University Press, 1968).
- (84) David Magarey Earl, *Emperor and Nation in Japan Political Thinkers of the Tokugawa Period* (Seattle: University of Washington Press, 1964).
- (85) Ronald Philip Dore, *Education in Tokugawa Japan* (Los Angeles: University of California Press, 1965).
- (86) Conrad Davis Totman, *Politics in the Tokugawa Bakufu, 1600-1843* (Cambridge: Harvard University Press, 1967).
- (87) Helen Pui-king Ku, "Chu Shun-shui : His Life and Influence," Doctoral dissertation, St. John's University, 1972.
- (88) William Theodore De Bary and Irene Bloom ed. *Principle and Practicality: Essays in Neo-Confucianism and Practical learning* (New York: Columbia University Press, 1979).
- (89) J. Victor Koschmann, *The Mito Ideology: Discourse, Reform, and Insurrection in Late Tokugawa Japan, 1790-1864* (Los Angeles: University of California Press, 1987).
- (90) Harry D. Harrotunian, *Things Seen and Unseen : Discourse and Ideology in Tokugawa Nativism* (Chicago: University of Chicago Press, 1988).
- (91) Wildman Nakai, *Shogunal Politics : Arai Hakuseki and the Premises of Tokugawa Rule* (Cambridge: Harvard University Press, 1988).
- (92) Marius B. Jansen, *China in the Tokugawa World* (Cambridge: Harvard University Press, 1992).
- (93) William Theodore De Bary, *Waiting for the Dawn: A Plan for the Prince: A study and Translation of Huang Tsung-hsi's Ming-I Tai-Fang Lu* (New York: Columbia University Press, 1993).
- (94) Yuxin Lu, "Confucius, Zhu Shun Shui, and the Original of Japanese Statebuilding in The Tokugawa Era: 1650-1700," Doctoral dissertation, St. John's University, 1998.

- (95) 湯壽潛が馬浮の『朱舜水遺書』(1913年)に書いた序文。『朱舜水全集』、頁3。
- (96) 前掲朱謙之『朱舜水集』付録1、伝記、頁641。
- (97) 錢明「朱舜水事跡回伝故国考之一」、『孔孟月刊』第39卷第4号、2000年、頁27。
- (98) 前掲湯壽潛序文。
- (99) 錢明「朱舜水事跡回伝故国考之一」。同「朱舜水事跡回伝故国考 清末民初の朱舜水熱」、  
『中日文化交流的偉大使者 朱舜水研究』(北京:人民出版社、1998)。同「朱舜水事跡回伝故  
国考之二 家郷親友的朱舜水情結」、『朱舜水与日本文化』(北京:人民出版社、2003)。
- (100) 魯迅「坟・雜記」、『魯迅全集』(北京:人民文学出版社、1991)卷1、頁220-221。
- (101) 魯迅「且介亭雜文・隔膜」、『魯迅全集』(北京:人民文学出版社、1987)卷6、頁42。
- (102) 楊憲邦「弘揚朱舜水堅貞愛國、復興中華、經世致用的実学啓蒙哲学思想的精華」、前掲  
『朱舜水与日本文化』、頁52。
- (103) 趙建民「繼往開來写華章 朱舜水研究的回顧与前瞻」、前掲『朱舜水与日本文化』、頁73。
- (104) 同上注、頁69。
- (105) 陳增輝「朱舜水教育思想簡論」、前掲『朱舜水与日本文化』、頁209。
- (106) 李鳳全、前掲『朱舜水与日本文化』後記、頁237。
- (107) 前掲王瑞生『朱舜水學記』、頁313-315。
- (108) 詳しくは、前掲『新訂朱舜水集補遺』、黄俊傑の序文一。
- (109) 拙稿「近世中日文化交流の一考察 「存誠長崎筆談」による」、『華岡外語学報』復刊号、  
1994年。
- (110) 前掲呂玉新「有関朱舜水研究文献目錄」、頁22。
- (111) 倉員正江氏は「水戸藩『大日本史』編纂紀錄(往復書案)に見る知識人の交流と出版文化  
の研究」と題し、平成16年(2004)度日本学術振興会科学研究助成を得た。すでに発表した  
論文は『舜水先生文集』編纂事情(一) 『大日本史』編纂紀錄を中心に、『人間科学研究』  
(日本大学人文社会系紀要、2004年3月創刊号)同論文(二)『近世文芸研究と評論』第66号、  
2004年6月。同論文(三)『人間科学研究』第2号、2005年3月。
- (112) このシンポジウムは東京大学の小島毅氏が代表とする科研特定領域「東アジアの海域交流  
と日本伝統文化の形成」のプロジェクトの主催である。